

朝湯

泉鏡花作

一

よし／＼同じわざながら、世にこえたりな此海の、
名所多き数々に、浦山かけて詠れば、志賀の都、花
園、むかしながらの山櫻

「おい／＼、姉さん、姉さん。」

いきなり背後から、脊中をトンと叩かれて、里吉
は一寸驚いた。

溢も濱も陰々とした五月中旬の夜である。骨ぐみ
は出来たが、まだ葭聳は蔽うてない、片瀬の砂丘の
海水小屋に、籐椅子に掛けて、江の島の――風
が大分吹きすさぶ――浪がしらに對して、竹生
島の一曲を謡つて居る處を、たちまち小屋裏から、
聲とゝもに手を出したものがある。

思はず振向くと、頬被をした、着流しの、怪しげ
な兄哥が、磯馴松を小楯に、ぬつと半身を突出して、

雲を洩れた月に蒼黒く立つて居る。

囊のものを探るやうな此の不遠慮さ加減では、すぐに女の口へ手でも當てかねないやうだつたが、然うはしないで、唯ニヤリと笑つた。

「何だ、お前さん！」

當の里吉よりは、傍に蹲んで聞いて居た、肥つた丸鬚の女が、怯えたらしい大きな聲でたしなめるやうに言つた。・・・こゝに附添つて居たのは、お伊乃と言つて、内箱とか稱へる藝妓家の女中のやうなものである。

里吉は新橋の藝妓だが、いゝ旦那持で。・・・今年ことしの春寒はるさむに、かぜをひきこじらしたのが原因もとで呼吸器ききを損じたゝめ、一旦入院たんにふあんまでしたくらゐで、大略かたぜんぢ全治うへの上にも、念ねんのため、此處こゝの瀬川館せがはくわんの一構かまへに氣まゝの出養生でやいじやうをして居るのである。年組としも三十近い。ー 容色きりやうはよし、藝げいも達者たつしやで、長唄ながうたは名なとりだと言ふし、一中節いちちゆうぶし、河東かとうなども、一寸見臺ちよつとけんたいにも向むかへれば、地ぢにも立たてようと言ふ土地とちでも屈指ゆびをりの姐ねえさんださうである。が、其その所謂いはゆる旦那だんななるものが、

太く謠曲に執心な處から、自然、能舞臺へも近づけば、其の流儀の樂師、師匠たちと、酒席などで懇意に成る。・・・風説によると、若手の能樂家連中が、近頃、日本橋で壯ださうで、里吉は場所は違ふけれど、旦那に連れられて出向きもすれば、馴染だし、話が合ふから、連中の方でも遠出で呼出すと言つた形。

めつたに人前で上下をとらない、いつも紋着袴で端然として居さうな樂師たちも、酒が亂れて、女から、あなたや、一段とねだられると、謠を一段は可笑しいが、可し、一段と心得た、と太夫が狂言師に早變りをして。――身は蠻人の袖ともに、思ひをほさぬ心かな――なぞと清艶な處を聞かせるから、門前の小僧どころではない、どうかすると、四疊半の口うつしに――影恥かしき我姿、思ひ車をひく鹽の・・・と、つい後をつけて謠ひもする。自分たちが苦勞した、清元や長唄を客が黄なる音聲を發してつけて唄つたら、姐さん苦い顔をして、あゝ、御人體がすたんなさる・・・およしなされば可い、とさますであらうのに――途に

迷つた素人の悲しさは、藝妓でもかはりはない。……歴乎とした師匠の聲腰へ、（子をとろ子とろ。）のやうな形でつかまつて、めくらの垣のぞきに曲を覺えて、嬉しがるのが大分ある。

が、藝に器用な里吉である。さすがに、いくら好に成り、おもしろく成り、嬉しく成つても、自分人前で謠ふやうな事はせず、新橋の住居では、じやうだんにもウゝと聲を出す事はなかつたが、春の半ば頃に此の海濱に来てからは、然まで憚るべきでもないので、日向ぼつこの口ずさみや、そゞろあるきの手拍子に、つい何時となく、ふし馴れて、何うやら聞覽えの文句だけは謠へさうに思はれはじめた。

勿論 ー 時々見舞ながら遊びに来る旦那は、謠本を松蔭に蟠らせて、人を惱ます事土蜘蛛の如しであるから、そんな時は、頼光のやうに弱つて、里吉の方が脇息に凭れつゝツンとする次第と御承知ありたし。

はじめは、看護婦が附いて居たのであるが、今では全然保養だけで。それも、最うやがて歸京する事になつたので、引揚の準備かた／＼、入替つて、此の二三日、内箱が来て世話をして居た。

此の内箱なら聞かせても我慢をしようし仔細ない。一人聞くととなると謠ふにも張合がある。

で、實は今夜で三晩続く。―― まだ小屋に、腰掛の支度もないから、別荘の縁側から、お伊乃に椅子を持出させ、病後でもあるし、刺繍の羽蒲團で凭れた様子は、一寸貴婦人に擬ふけれど、藝妓だから、長火鉢の猫板に腰掛けた趣で。・・・砂山の松の葉越しの眞向うに、むく／＼と白く湧いては颯と翻つて月に躍る浪に對し、其の濁つた月に、横なぐりに吹く風に、これが引攪つて、何處へも聞えまいからと、餘計に氣競つて、聲を張つて・・・下方の覺えがあるから、さぐり手ながら、拍子を打つて、里吉は興に乗つて居た處。

すがた 姿がと言ふと、白地の浴衣に唐棧縞のお召の袴、
艶の濃い、少々白粉のついた黒縹子の襟掛をぞろり
と襲ねた寝衣のなりで、風は荒いが南で汗ばむほど
だから、朱鷺色の伊達巻を緩やかに絡へるのが、ず
れて幅廣に細腰をめぐつて、薄暗い月影には、其處
に白い膚が露れたやうで、裾はひら／＼と煽
る……媚かしいものであつた。

あたりに入ツ子のないのを見定めて、憚らず此の
しどけない容子だから、いきなり背を叩かれた里吉
も、警護と聞役を兼ねて引添つた内箱も、濱で人間
に出撞したよりか、唐突に閨へ踏込まれたやうな思
ひがしたらう。

怯えたに相違ない。

「何だ、お前さん。――と、ぎよつと後へ
退きながら、聲で掛突つた、内箱の方は見向きもし
ないで、頬被の兄哥は件のニヤリで、

「拙い。」

と言つた。

「――」

「拙いなあ！」

「チヨツと鳴して舌うちして、

「拙過ぎるぜ、姉さん。」

「何だつて。」

「と内箱は、此の言種にいくらか力づいた。」

「——姉さんとは何です、……失禮な。」

「お前さん、其の氣だから不遠慮なんだ。姉さんもないものだ、奥様だよ、失禮な。」

「おい一寸……野宿をするものゝ目には、おなじやうでも、夕顔と瓢箪の花の見分けが附くんだよ。怒んなさんな。悪い氣で言つたんぢやあねえ。ほどのいゝ意氣な姉さんがすたるぢやあないか、見つともないよ。」

「大きにお世話だ。何もお前さんにお聞かせなさりはしまいしさ。」

「聞えるから仕方がないよ。よしんば人が居ねえたつて、お月様もありや、海もある。……それ、波はぎあゝ打つけて居るが、江の島の棧橋が幽に見えて凄いだやあねえか。巖窟のお姫様に聞え

るんだ。―― 恐多いぜ、變な聲で。」

「へ、お姫様に知己があるツて柄かい。」

と内箱は、弱身を見せず、むつくりと立つて、兄
哥の風體をじろ／＼視た。―― 尤も住居の別荘
から、まばら垣の木戸一つ、砂濱一面の小凸い處で、
母屋の瀬川館も遠くはない。又それに言ふ事を聞いて
見れば、濫に亂暴はしさうもないので、内箱は氣
が強い。

「勿論だ。」

と頬被の上から頭を敲いた。此で見ても安手な兄
哥で。……薄汚れた袷、くたびれた角帯で、
生白い足を尻端折の跣足で居る。……風に揺
れる松の枝に片手を掛けて立つた身の、男の影は緑
だが、吹けば飛びさうな風情である。

「お姫様にお知己なぞと、聞いても恐多いがね、
私は島の門番だよ。片瀬川の河童さね。」

もう一つ頭を敲いて、

「……尤も通力はありません。岡へ上つて居るからね。おまけに鼻ツさきを歩行いたのが姉さんだ。襦袢もなしの寝衣が何かで、色の白さつたらないぢやあないか。潮風でやけるから白粉の濃い顔より、太脛が尚ほ白い。」

「まあ、驚いた。」

と、里吉はむず／＼と袂を揺つて、

「まあ、氣味の悪い。」

「いや、氣味の悪いのは此方だよ。姉さんの件の姿が、生暖い風に乗つて、ふら／＼と通つたんだ。」

「――雲の上からでさへ、踏はづして落ちる處を、私だつて乾上つ了はうぢやあねえか。逆上せ反つて顛の水は乾くし、咽喉はひりつくし、腹はすいてるし、遣切れたもんぢやあねえ。」

と、げそりとしたやうに胸を折つて、里吉の椅子の裏に蹲込んで、

「何んだ。……恚うやつた處は、芝居茶屋の男衆が棧敷へ顔を出した形で居やがら。は／＼」

はゝゝ。」「

と、掠れた笑ひ方を行る。

「まあ、驚いた。――氣味の悪い。」

と内箱も此の際、姉さんと同じ事を呟いた。

里吉は、椅子のかゝり越しに、横向けに、くの字に成つて、世馴れた目で、熟と兄哥の風格を眺めたが、

「一寸、お前さんは、一體何處から來たのさ。」

「だからさ、何處からと聞かれれば、また川から上つたと言ひますがね、何處に居たと言はれりや

――彼處だよ、野宿だよ。」

と言つて、背後斜の砂丘の窪を見返つた。

「あゝ、それで野宿が何うしたとか、夕顔が何うとかつて、お言ひなんだね。いゝ心持で居なさる處を、こんな、うまい態をして」

と、今度は襦を深く引寄せながら、

「ふら／＼枕許を歩行いたり――些とも氣がつきはしませんかつたが――變な聲を出したり。……いゝえ、私だつて變な聲で、他御迷

惑だと思ふからこそ、こんな人氣のない寂しい處
で、……内々もの凄いのを我慢して
」

「眞個、まつたく
」

と氣を入れて領きつゝ、

「海は荒れてるし、月は暗し、見て居て凄いやう
だつけ。……小屋に注連を磔らないばかりで、
生身な姉さんが、人身御供に上つてる形だね。・
・・笛を吹いても、夜は蛇が寄ると言ふ事だ。」

「――處で。」
と、また掠れ笑つて、

「あれだ、あの聲だ。――昔ながらの山櫻だ
らうぢやあないか。眞野の入江のふなよばひ・
・いまにも荒波を押分て、むかし朝比奈が組んだ
と言ふ、鰐鮫がよばひに來さうで、ひや／＼したん
だ。」

「まあ、驚いた――氣味の悪い。
と、又内箱は口について同じ事を言ふ。」

里吉は莞爾して、

「ほ／＼、難有う。――お庇様で助かりまし

た。お禮とお詫を一所に言ふわ。……濟みま
せん、堪忍して頂戴。」

と軽く椅子を離れると、絡るやうに裾が靡く。
内箱がすぐに梅子を抱いて上げた。

「おや、姉さん、——それだけかい。」

「それだけに、此だけに、何も文句はなから
うと思ふがね。」

「弱つたな……然う早速ぢやあ弱つたな。」

（まづい謠が何うしたの、）とか何とか言ふか、
「おかげで人身御供を助かつたから一盞。」——

とか、何とかなくつちや弱つたな。もし。」

と調子を低くして、

「途中が寂しいから、送りませうよ。」

「こゝに確なのがついて居らあね。」

と内箱が、勝に乗つて、鐵砲の如く片手を突出す。
「弱つたな。——何とか便船申したいが、叶

ふまじく候かね。」

「叶ひ候ひませぬ。」

と里吉がきつぱり言つた。

「弱つたな。」

四

けれども、何故か、里吉が、胸の両袖を風に振り
拂つて行かないのを見て、兄哥は撓腰で、頬披のまゝ
片頬を撫でた。

「だがね、かなひ候はぬまでもだね。姉さん、お
前さん、謠には少とばかり心得はあるやうだね。」

「いゝよ、今更。．．．何うせ、鰐鮫に見込
まれさうな聲ぢやあないの。」

「怒つたかい。」

「いゝえ、怒りやしません。もつともだと思ひま

す。」

「偉い！」

と一つ膝を敲いて、

「其の心意氣なら話が解る。．．．姉さん、
謠は賺ひぢやないやうだね。」

「大すきさ。．．．だから、恥も搔かうぢやあ、
ありませんか。」

と、もう一息兄の状を膽りながら、

「あゝ、お前さん。．．．心得があるんだわ

ね。
「

「有るんだとも、大した事はないけれども、先づ
お前さんとは段違ひだ。お月様と泥鼈ぐらゐなことはあるんだよ。」

「御挨拶だね。」と眉を顰めながら婀娜に笑つた。

「處で、ものは相談だが、嫌ひでないなら、一番私に謠はして聞かないか。」

「然うねーうかゞひませうかね。」

「姉さん。」と内箱が椅子と一所に頭を掉つた。

「まあ、可いよ。」

「其處でと」

一寸言漉つて、

「御覽の通り、何うせこれ大道藝だ。が、多少と

もだ・・・お前さんより上手だと思つたら。」

急にさら／＼と砂を亂して寄つて来て、腕を長く、

掌を鯨に煽つて、

「いくらか出しねえ。――腹も空いてれば、

寝る所もないんだから。」

「おや、すなほだ事・・・柄にない。」

「旋毛を見てくれ。」
と、頬被を除つて又敲いた。鬘も見えて、陽にやけたが、目鼻も、口も凜としたのに、眉の柔和な、
年齢は二十七八の人品な兄哥であつた。

「人間はすなほだけれど、心の方角が間違つてね、
御覽の通りの有様だ。ほかの藝ごとゝ違ふから、此
奴ばかりは、今時は門背戸へ立つて御報謝は受けら
ねえ。町なり、里なり、流れ込み次第に、お前さ
ん、大地へ耳を押つけて、井戸掘が水の音を捜すや
うに、何處か謠のウの字でも遣つちやあ居ねえ
か。……聞えたら最後、押掛けて、喧嘩越の
道場破りだ。――一宿一飯にもありつかうし、
間が可くば半月逗留と言ふんだが、そんな口は滅多
にやあ見着からない。偶にはあつても、田舎まはり
ぢやあ對手が下手過ぎるから買つちやあくれずか、
何にしる、御難つゞきだ。――姉さんは、解つ
てくれさうで嬉しいから饒舌つたが、恚う言つたつ
て餘許な散財をさせるんぢやあない。――ぢや
あ一つ砂がきの繪と言ふ所で遣つつけよう――と、
此處ぢやあ、お前さんぐらゐの耳に聞かせるのには

近過ぎる

「

立ち直ると、不思議に鷹揚な態度であたりを視た。
「精々お傍には居たいけれど。」と、すつと退
くのが、風に吹かれて、月の影に浮くやうで、白砂
に立てる青松に、偶と橋がかりの風情が見えた。

足のはこびに目を留めて、里吉は、襟を引合せ、
引合せて、

「貴方、椅子を上げませう。」

小松が下に、もう其の砂に坐るのを視て、

「あゝ、お蒲團が可い、—— お伊乃さん

「拒んで顔を掉る内箱の肩を敲いて、里吉が低い聲
して、

「たゞ人ぢやあなささうだよ。」

「えゝ。」

「いえさ、お化らしいんだよ。」

「えゝッ。」

五

内箱は、うつかり落すやうに椅子を置くと、掛つて居た羽蒲團を拂きながら、急に更まつて、其の癖浮足で、八九間持つて出て……兄哥の横から、しやがみ腰で、

「何うぞ……お敷てなすつて、」

「いゝや、要らない。」

どつちつかず手を放したのが、羽で軽いから、ふはりど風に起つと、ぎよツとしたやうにお伊乃は退つた。

蒲團は翡翠の舞ふやうに、影を、綺麗に翻し、くる／＼と砂に、込つて、宛如一客の座を別に設けた如く、松の一本の根に留る、と、眞空の雲の一團暗い中に閃々と星が光つた。

兄哥が胸を張り、肩を斜に、此を視ると、ハツとしたやうに、両手を地に叩頭をした。

里吉は思はず、此方で膝を支く。

「いや、其のまゝ。」

と忽ち笑つて、

「大道藝は立見が結構。――」と、たゞんだ
手拭を懐申する時、ぬき出したのは、一本の扇であ
る。

巖打つ響、渚の高波。

「やあ、勢よく打込むな――あの波の鼓にこ
たへられるか。確り頼むぜ、と言つた處で、恚うし
た處は、燈心で切腹をするやうだ。」

けれども、身構は端然として、衣紋に沈んだる艶
も添つた。

實々か程疑の、あら磯畠島の松蔭を、たよりに
寄する海士小舟。我は人間にあらざとて、社壇の扉
を、おしひらき、御殿に入らせ給ひければ……

「あゝ、兄さん、貴方。」

と言ひ／＼、はらつく裳で、草履をさら／＼と里
吉が急いで寄つた。

「一寸、貴方や。」

「やあ。」と、目が覺めたやうに、ふつと句切

ると、掌を煽つて出した。

「幾千金か、くんねえな。」

「まあ、何ですよ、そんな事——え、お禮

はします。それよりも一盞あちらで差上げませう。

お座敷ツてはどでもありませんが。……そして、其方で更めて聞かして下さい。」

「しめたな……些とはお氣に入つたかね。」

「え、結構、結構ですわ。——結構過ぎま

すわ……貴方、それほどの藝をお持ちなすつ

て、野宿をして、お腹が空いて……私、何

だか悲しくなつて、ひとりでに涙が、」

と、情の姿しつとりと、いたはるやうに身を寄せ

て、思はず、袖口を目に當てる。寝衣の縞もなよ／

＼と、繻子が夜露に際立つて、頸の白さも濡れたや

うである。

兄哥も腕を拱いて、黙つて首垂れてほろりとした。

呆氣に取られた内箱が、心付いたか、蒲團を拾つ

て、

「姉さん、……お身體が冷えますよ。……」

・ ・ ・ あなた、病氣あげくぢやありませんか。」

「あゝ。」

と、それでも色つばい鼻聲で、

「お前さん、駈出して、木戸を開けながら、母屋

へ、聲を掛けて、見繕つてね、可いかい。 ・ ・ ・

え？。 何さ、 ・ ・ ・ 大丈夫だよ、心得てらあ

ね。 早くおし、急いでさ。 ー さ、入らつしや

い。

「故と御辭退申しますまい。 ・ ・ ・ 唯今女中

へのお言葉では、檀那がお留守らしいから。」

「知りませんよ。」

「しばらく。」

「あれ、吃驚した、 ・ ・ ・ こんな處を、鳴が

飛ぶかと思つたら。」

薄汚れた鼠色の中古帽が、くしや／＼と羽を擴げ

たやうに、風に従つて舞上つたのである。

「すつとこを遣らないと、凄味がないからと思つ

てね。 帽子の鉢巻と蝙蝠傘のしめ緒を結へつけて置

いた奴さ。 待つて下さい ー 下駄も穿きます。」

里吉は褌を取りながら、すかすやうに其の砂土手

の松蔭を。

「こゝに野宿をして居たのー道理こそ、さ
つき通る時、血が痒いやうに、こぼれ松葉が、裾か
ら太脛を擦つたんだよ。」

「私の鼻毛がつゝいたのさ……其の白やかな處をね。」

「まあ、何うしよう私。」

築地何丁目かの（水仙）とか言ふ、支那料理を出た二人連がある。――道を歌舞伎座前、電車通の方へ取らないで、ぶら／＼歩行で河岸へ出たのは、一杯機嫌を夕風に吹かれる氣らしい、が、風は些ともない。

「大分蒸しますな。」

「然れば。」

前のは、五十三四のでつぶりした金持風で、無地の絹の單衣に、鑄鐵縫紋の同じ羽織、セルの袴を裾擴がりにふはりと捌いた、象の足に草履穿、紺足袋でちと反身に、太腹をうんと張り、胸を引込めるやうにして、はた／＼と扇子使で行く。水際に並んだ後のは、扇子を左膝へちよんとさし、織ものゝ帯をきちんとしめ、寓條の結城を着た、小柄で痩せたお爺さん。

――茶無地の薄羽織を袖疊みにしたのを、紙入と一所に、懷中ばかりづつしりと大いが、日和下駄で、ひよこりと行く。やゝ、いかつい肩つき、乾か

らびた手首に、世に事古りたる更紗染、媼どのの手
縫と覺しき信玄袋、緒のしめ方が粗雑ゆゑ、袂落し
の煙管筒が、あはれ本願寺が近いから、其の媼どの、
お土産の線香のやうに端が覗く。・・・かて、
加へて手拭までがはみ出たのを、ぷらりと下げ、繻
子張の太い逞しい蝙蝠傘の、老ゆゑの杖と見られる
を心外とか、つかずに、張肱で突張つて居さつしや
る。年紀は連の男の上を、もう十ばかり。帽子だけ
は見事にして、眞新しい。ハナマだが、寸法がたる
んで、耳の根まですつぱりと嵌つたさへあるに、ず
り下るのを頤で掬ひ据ゑるやうにして、用心の護謨
紐を、きちやうめんに結んだ體は、陣笠に似て宛然
たる雑兵首。しかりと雖も、かぶさつた廂の底から、
遠く想ひ、遙に望む、細くて薄睡つたやうな皆に威
があつて、への字を逆にした唇がキリ、と緊
る・・・此奴が、ともすると小鼻の皺を買いて、
左の方へぐいと釣上ると、些と事が面倒で、あたり
近所へむづかしい。これぞ當流の能樂界、宿將の第
一人、六方惣三郎、行年つもつて六十四歳、あだな
豆腐老人である。

どの字書じびきを翻かへしても（豆腐とうふ）——と言いふ、
こんな字じは見當みあたらない。……案あんずるに、此この
小父をぢさん、一歳ひととせ一門いちもんの若手わかてを引率いんそつして、甲府こふへ興行こうぎやう
に赴おもむいた時とき、舞臺ぶたいを濟すまして休息きゅうそくの旅館りよくわんへ引揚ひきあげると、
聞きこえた大酒豪だいしゆがうが酔よひに乗じようじて、周固しうゑの警告けいこくをもつと數かず
ともせず、土地とちの藝妓げいしやを總上そうあげにすると言いつて奮出はずみだし
た。時世じせいに疎うとかつたのである。たか／＼田舎ゑなの新地しんち
である。箒蕎麥ざるそばか、針箱はりばこどころで、片手かたてで持もてるも
のと思おもつたのであつた。お弟子でしの算盤そろばんの違者たつしやなのが、
給仕きふじの姐ねえさんに、「串戲じやうだんだがね、」と逃にげを張はつ
た上で、當あたつて見みると、其その旅館りよくわんの居ゐまはりだけで
も、お酌しやくまじりに三百何人なんにんと言いふのを、もれ聞きいて
舞臺ぶたいに釣鐘つりがねが落ちたほどに仰天ぎやうてんし、豫かねての我慢がまんが此こ
の時ときばかりは尻餅しりもちをついた。が、一旦たんそつ總そうあげと言いひ
出したものを、おめ／＼と引込ひっこんでは、中興ちゆうこう彌次郎やじろ
兵衛べゑの名なをれになる。はて、何をなにがな總揚そうあげの廉かどを立た
てずんば、と其處そこで思おもひついたのが大だいすきの豆腐とうふで
あつた。朝あさから三度とづゝ幾いっつかでも飽あきないほどだから、
此これに振かきると、一旦たんはいぼう敗亡ばいぼうして峠とこの間まを落おちたのが、そ
の表座敷おもてざしき大廣間おほひろまの縁側えんがはへ踏留ふみとどまり、欄干らんかんに肱ひちを張はつ
て、町通まちどほりを睨廻ねめまはした。——山々やま／＼もみぢの夕暮ゆふぐれを、

熱爛で氣競ひつゝ下を通る豆腐屋を、片つ端から呼
込ませて、焼も、あげも、がんもどきも、荷にあ
るだけは空にさせた。しぐれの頃とて豆腐は賣れる
季らしい。やがて、小父御の年の數はど賣子を數へ
たさうである。

以來、蔭で豆腐翁、豆腐老人などゝ言ふのを竊に
知つて、苦笑ひして居たが、やがて自ら表徳とした
ものだと言ふ。……が、わがものに腐の字は
可厭だ、場所は甲府だ——其處で豆腐と稱した
のである。いま連れの漢は其の時の興行に別に關は
りはないのだけれど、同じ甲州郡内の山持で、東京
に大肥料會社を経営する、——棚澤十内。——
此が里吉の……旦那々々。

「これは一雨來ませうぜ。」

と、十内が寛げた白襟を煽ぎながら言ふと、

「然れば」

と、もう一息目を細くして、夕暮の空模様を仰いだ、豆腐老の目は、とろりとして居る。

「日和癖だてね。さしたる事もありませんまいが、大分空が暗くなりました。尤も、もう日の暮だ。」

ほう、其の癖、此の邊の森は伐拂つて明く成つた。いや、三方堀のやうな川で、樹木森々としたもので、夜分はもの凄い處でね、此處等、諸侯方の別莊地だ。河童の本場さ、近い頃でも、よく人が魅されましてよ。」

と言ふうちに、瘦脛を片足擡げて、單衣の尻をぐいと端折る。

「大先生、大丈夫、まだ電燈が入つたばかりです、燈が白いくらゐですわい。お身構には及びません。」

「は、いや、此は。」

と、はじめて氣の付いた様子で、洒落れた稗詩でないと、此のあたりのものは見知るまい案山子のやうなおのが形を、あはれむが如く顰み視て、
「魅す奴より、化ける奴だ。此の方が先へ尻尾を顯しました。習は性とか聞きますが、さて、可恐いものだてね。最早や久しい以前には成るが、此方人等づれ世に詰つて、駿府――静岡だね――
駿府へ落ちて、お城のまはりの夜番を勤めた覚えがあります。」

「ほう。」と、又一つ大きい襟許を煽いで言ふ。
「御維新あとさきの、あの騒ぎだ。――見殺しも不便とあつて、ぼつちり餌は下されたが、駿府で謹み中の將軍家だ。八百萬石の身上も、其の日暮しと成つては、能どころの沙汰ではありません。まして駈出しの此方人等如きが、扇を開いて立上つた處で、厩の蠅も追へない次第さ。さりとして、一椀に預る冥利、唯遊びでは勿體ねえから、其處で火の番の夜廻りさね。駿府城の濠のへんを、毎夜、夜陰に及んで。」

と采女橋を渡りかける。

「はゝあ、——（明治三十五年成）——

か。」

屈み腰に透し讀して、

「三十五年と……采女にしては年を取つた

が、——橋にしてはまだ新娘だ、此の方の好む

處。」

と、蝙蝠傘を橋板へトンと支く。

「御道理で。」

「いや、御貴殿とて、嫌ではおあんなさるまい。」

「はゝゝ、飛んだ御串戯。……しかし、火

の番の夜廻りとは、大先生、浮世ぢやなあ、でござ

いますなあ。」

「今以て浮世さね。——處でだて。……

かの夜廻りの棒突が、裾の切れた熨斗目もぞろつか

せては居られませんか、足輕端折にぐいと端折つ

て、それ六尺棒をストン／＼。……と此處だ

てね。196餘程身に沁みたものと見えて、まさか、

川端では然もありませんが、城構の水を見ると、つ

いうつかりと尻を端折る。はゝ、ばけ次手だ。暑い

時は此も宜しい。些と此のまゝで御免を蒙る。……

・ ・ ・ しかし話さね ー 話と言へば、右の夜
番が何よりも弱つたのは、五位鷺、蒼鷺の聾であり
ましたよ。城の森は彼奴等が巢で居る。處で、寂れ
はてゝ、草は茫茫たり、水は陰々たりだから、晝で
さへ人間を憚りません。況して夜陰の横着さと言つ
てはないので。眞暗な足許から、ばツと凄じい音を
たてゝ、天狗飛びに飛切るです。又かと、後では思
ふものゝ、其の度ごとにぎよツとして、引息に、は
アと尻餅を搗くやつだ。別して梅雨時の暗夜は弱り
ました。中には、光る奴がある。人魂の鬼火のやう
に、然る場合は、思はず念佛を稱へました。いまだ
に怨恨骨髓に徹るてね。あの、先刻の、（らうち
う）とか言ふ酒に酔つて言ふではないが、支那料
理に、燕の巢があるものを、鷺の羽のおひたしは出
来めえかね。 ・ ・ ・ 此の方、五皿ぐらゐ退治た
いて、無念ばらしに。

「危い ・ ・ ・ 先生。」

衝と五六臺、出場は香雪軒か、瓢亭あたりの、藝妓
を乗せた幌俵が、羅の黄昏を、斜に雨緋のやうに駈

通とほつた。

道みちは廣ひろし、油ゆ斷だんで歩あ行るいた豆とう府ふ老らう。ひよる／＼と
成なりながら、蝙蝠かうもりがさ傘がさをストンと支ついて、目めを据すゑて、

「やあ、鷺さぎの奴やつら等ら。しかし、いづれも白鷺しらさぎだね。

中なかには光ひかつたのがある。はゝゝはゝゝ、恐おそしい。」

十内は、袴のひだを踏開いて、早や采女橋の上を
 抜ける、其の俣を見返つた。

「大先生　　ー　五六羽生捉りませうですわ

い、．．．．．術無念ばらしに。」

「御意だが。」

と俯向いて、こん度は足許を至極丁寧に、端へ寄
 つて歩行きながら、

「益ざらん事だてね、ひたしものには成るまい
 から。」

「さあ、ひたしものは如何ですか。しかし、」
 と鼻の前で扇子を疊んで、其の手で袴の太股を鷹
 揚に敲いて言つた。

「なまで食はせる處はありますすな。」

「あの、白鷺を。」

「勿論で．．．．．白鷺でも、五位鷺でも、生
 身ならおこのみに應じられようと思ひますな。」

「何、白鷺を、なまで食ふ．．．．．無慙だね、
 聞いても虎狼の餌食のやうだ。」

198 と、ぶる／＼とパナマ帽を横に掉るのが、老の身なれば、もの寂しく、蚊遣りにそよぐ蓮の葉に見える。

十内は、再びさらりと扇を開き、腹に當てつゝ、

「虎、狼と申せば　　―　　話は些と別ですが、

お能の獅子に、連獅子と言ふがありますな。」

「然れば。」

「まだ、大先生にお弟子入をしません前に、根が執心なものですから、他流を見物しました、　　―　　―

あれは、何と言ふ謠にありませうかな。」

「はあ、何と言ふ謠とは。」

「たとへば、熊野とか、松風とか、内外何番とか申しますな　　・　　・　　・　　其の事で。」

「あゝ、いや、連獅子と言ふ謠ものは別にないの
で。　　・　　・　　・　　石橋とおなじさね、　　―　　、普通

は獅子　　一頭の處を、赤頭を連れて白で立ちます。
其を連獅子と言ふんだが、石橋はその許御存じだ

　　―　　あの　　（大きinkyんの獅子頭）　　とある
處を、　　（大きinkyんの連獅子）　　と謠ふ、唯そ

れだけが違ふんだね。」

「此は……いや、此は何うも。」

と、十内は叩頭をしないばかりに胸を扇で敲き／

、

「飛んでもない素人でしたなあ。……社中
また倶楽瑯などで、風説をしますにも、一度は、舞

臺で、大先生の、」

こゝは格別大先生で。

「連獅子を拝見したいが、なか／＼容易には、番
組にお載せに成らないと、いつも一統が言ふもので
す。成桂、一大事の御秘曲で、謠も別にある事と
存じました。――先生の御直門で居ながら、此
は何うも恥入りしましたな。」

「少しもお恥ぢなざるところはない。――當

り前だ――懃か知つたかぶりをされては、其こ
そ恥辱に。……御存じない方が結構だ。」

と、つけ／＼と遣つてのけた。これを通つた苦蟲
であるから、十内は氣にもしないで、「御尤も
です。世間一同……社中は勿論、一度是非と
も拝見をいたしたいと望んで居るのですが、……

・何しろ一大事のものと見えますな。」

「何。」

と、少し聲が沈んで、

「一大事……ほどの事でもないので、尤も大温習としてあります。が、それとてまだ、形をお見せ申すには仔細ない。お素人方の目には、手足が揃つて動きさへすれば綺麗事に見えて喝采だが、氣組の合ふ對手がむづかしい。さりとして……稽古を積みめばその氣組も合ひます、たゞ連獅子は、友だちが誘ひ合つたのでなし、角兵衛が連立つたのでなし、俳優が揃つたのでなし、藝妓が對に踊るのでない。――それは親子だ。――義理人情に搦んだ人間の親子の情は見せ易いが、獅子王の親子の情合を舞臺へ出すのはむづかしい。悪く兩方で、紅白の頭を颯と振ると、軍鶏の蹴合と間違ひます。拙でも實の親子だと、此が行りいゝ。形は不状でも情愛が出るのだが」

と理につんだやうに、偶と黙つた。しばらく肩で息をしたが、忽ち酔の發した面を上げて、

「や、あれへ石橋が顯れたね。――山河震動、

あめつちこれを揺かす騒ぎだ。」

空も雲もバツと輝く、銀座の宵の十字街を、怯え
たやうに、爪立つて打臨んで、

「むゝ、人間の牡丹が亂れ咲いたわ。夕陽の雨の
後に虹をなせる姿とは此れだね。其の面わづかに尺
よりは狭うして苔はなはだ滑なるよりも尚ほ危ねえ。
ー 足すさまじく、肝が消える。・・・・神
變佛力にあらずば、誰か此橋を渡るべきだね。

はゝゝゝ。」

「今日は、どちらさ。」

「本所の方だよ。」

「おや、本所かえ．．．．銚さん。」

と浴衣の意氣づくり、湯上りの薄化粧、小濱の蹴出しもくの字形で黒檀の小形の卓子臺に、夕顔のほのめくやうな里吉に不思議はないが――此の酒落は不思議である。

もの干のついた窓下に、風を吸つて對向つたのは――まだ故と窓の岐阜提灯にも灯を入れない黄昏とて、ぎやまんの鉢に装つた粒々紅の苺の方が、人顔よりも色に出るくらみだから、面はおなじくほのかであるが、顛に水なき片瀬の河童、あの頬被りを取つた兄哥に相違ない。成程、此の兄哥だと、然うした洒落も聞かされかねまい。脱いだまゝで差置いた薄羽織も、着て居る紺の薩摩紼も、何處か、芝邊の裏町に、當時二階借のまかなひ寓端、すべて里吉の仕送りださうであるから。

時に、婦が、銚さんと言つた。いまは最う打明け
て居るらしい。即ち六方老人の渠は甥である。男の
子のない名家に養はれて、其の後嗣に擬せられなが
ら、仔細あつて、一昨年、叔父の家から逐電し
た。・・・目下行方知れずであるべき筈。技倆
のほどは幽にも片瀬の砂丘の薄月の影に俛ばれる。
舞臺に立つては、優美より、暢達より、其の人から
に似ず、たゞ凄いと言はれた。―― 姓はなほ實
家のまゝなる、筧銚之助は渠である。

兄哥は偏にがつくり叩頭をした。

「あやまつた／＼。」

「可厭だ、誰も叱言なんか言やあしないぢやない
かね。」

「御意だがね。」

こゝらは叔父的の口癖で、

「其の洒落だか、地口だかにさ、・・・本所
にあやまつた。」

「あひ子だ、澤山。」

と團扇の柄で、軽く食卓を一つ打つて、

「此の暑いのに、本所くんだり、何をしに行つた

んだね。」

「……貸本には讀飽きるね。欠伸は出るし、涙は流れる、情婦は来ず。退屈で爲やうがねえから、例の又道場あらしさ、他流仕合。——去年かけて奥州めぐりで、寒いのは震へたけれど、其かはり暑さには怯げません。但しあぶれたね。工場ばかり、ぐわら／＼して居て、蚊の鳴くほどの謠の聲も聞えなる。——尤も本所で謠を捜すのは木に魚を求める類で端から間違つて居るんだが、悪く山の手なんぞまごつくと、知つた顔にぶつかりかねないから、止むことを得ませんのでね。」

「だから私が、そんな事——一體、貴方。」
と居ずまひを直しつゝ、
「そんな事をして歩行いて、お前さん、もしか謠の稽古をして居る人に逢つたら、矢張り、あの片瀬のやうな事を遣る氣なの。」

銑之助は掌を煽つて見せて、

「れこかい。」

「後生、もう、怪我にもそんな真似をしちやあ

ー 眞個に串戯ぢやありません。」

と言も、鬢もうつとりと、

「また本所ではないけれど、そんな事をするのが
度かさなると、洒落ではなくなりますよ。・・・

腹を立つちやあ可厭ですがね、・・・勿體ない、
お前さん大切な身体を臺なしにして何うします。

ー 私ねえ、何にも言はない。何うかね、片瀬
のあの晩ね、・・・一寸お泊め申す寸法に成つ

たわね。 お伊能が

内箱が臺所をがたつかせて、下に居るから、其の
名を言つて聲を密めた。斷るまでもないが、これは
里吉の住居である。三野家とかいて、そして（み
のや）と呼ぶ。

「・・・そちこちして、座敷へ床を取つたわ
ね。ー 床の間の傍へ、恚うならべて、」

と、身動した、何かの隈でよく見えない。

銚之助の方は、あけ放した、もの干の薄あかりに
様子が見える。掌を額に當て、うなづくや24
うに一つ敲いた。

「御意の通り。」

「まあさ、お聞なさいよ。――それで以て、枕を二つ。」

「いや隠でねえ。」と胸をひく。

「あれさ、意見をして居る處ぢやないかね。」

十

里吉の、爪楊枝に苺をさして、口に含んだのが、目の紅なる白い蝶が覗くやうに、暗い天井に面影して、

「おあがんな。おいしい事よ。」

「如才なく荒くはするが、藝妓屋の二階へ忍んだ

奴が、毒を突くのは可訝いぜ。」

「だから一銚子つけようつて言ふのに、銚さん

が。」

「此處ぢやあ御免だ。――食客じみるもの。

何、お前さんに遠慮はしないが、「おい、お銚子のおかはりだ。」何うもお伊乃さんや何かに言悪

い、――ひがみはしないし、ひがませもしないけれども、自然と氣がひけるのは人情だよ。あとが、どん／＼ついて来ないと飲んだ氣はしないから。」

「――分りましたよ、御催促なくとも。いつもの家へ行くけれどね・・・彼處はまだ／＼今頃はごたごたして居て、箱部屋なんか、出たり、入ったり、つい顔を合せると、なかまの口が煩いから。」

「御尤もで。」

「異う言ふね。」

と團扇の風が邪慳らしく兄哥に當つて、

「すぐに檀那に、いつ／＼け口をされるつてんぢやあないけれどさ。片瀬から歸つてから、なまけ次手に、よく／＼でないと、まだお座敷を受けないんだもの、園鬚なんかに結つて納まつてる處だから、何の彼のつて面倒さ。――やばの引込む時間にな

るまで、もう些とお待ちなさい。」

「悪く、何いそぎとかをするやうに言ふもんだな。さきへ行つて待つてるよ。私一人なら構やしない。」

それとも銀座をふらついて窓飾でも覗いて居よう

か。」

「およしよ。ハイカラ染るから。」

「それぢや、講釋でも聞くとするかな。」

「可厭だ、餘り宿六じみる。」

「矢張り下宿へ歸れだらう。……よく出來

て居やがら。」

「誰が歸れと言ひました。……何故またお前

さんは此處に居るのが不可いんだい……一生

でも居26て欲しい、お里の宅ぢやありません

か。」

「御意だけれども、危ないよ。……それ檀那が

ね。……枕が二つは難有えが、私は首が一つきや

あねえ。」

「しと、大袈裟な事をお言ひなさいな。……

いゝえさ、其の枕だがね、……大丈夫よ。……

・ ・ ・ 何さ、あれ、面當がましく其處等を、きよろ
ノ、見てさ、憎らしい。――はい、御覽なさい、
此處は八疊一間きりでございます。生憎縁側つきの
方は、すぐ下が新道通りで、世間が煩いものでござ
いますから、裏の方でございまして――あの、
ずっと、あの葎簾戸は、手前どもで調べましたもの
で、建具について居たものではございません。床の傍
の影法師は、あれは金屏風でございまして、違棚の
本箱には謡曲の本が入つて居ります。また、貴方が
悪口をおつしやいませう。御道理でございまし
て。 ・ ・ ・ あひ濟みません。――が、此の頃
の里吉は、短い夜の寢覺にも、うとノ、晝のうたノ
ねにも、あの中なかの竹生島ちくぶじまを枕まくらにするとか申まをします。
――おや、又 ・ ・ ・ 枕まくらが出た事ことね。貴方あなたが
お氣きになさいます、其その暗くい處ところは階子段はしこたん。――
黒くろい頭あたまが出でませうとも、それは女中ぢようちゆうたちか、猫ねこのほ
かにはございませぬ。何なにとぞ御安心ごあんしん遊あそばされ、御自ごじぶ
分ぶんの住居すまひと思召おほしめし、お落着おちつき下くださいませうなれば、
恐悦きやうえつに存ぞんじ奉たてまつる。――
と三指みつゆびを行儀ぎやうぎについて、艶々つや／＼とした圓鬘まげを下さげて、
白しろい頸えりを見みせたのが、恭々うや／＼しく顔かほを上あげると、おやノ

、いつの間にか、銚兄哥は棒立ちに突立つて、薄暗がりくらくらをさぐり／＼ぬき見けんで座敷ざしきの中なかを廻まはつて居ゐる。

「まあ。」

「至し抵こ氣きに入いつた住居すまひだが、お屋賃やちんの處ところで折合をりあひますまい。第一だい、借家しゃくやの氣きぢやあ些ちつと癩しやくだ。」と、のそりと又また廻まはる。

里吉さときちは、つき膝ひざでうつかりと視みて居ゐたが、

「一寸ちゆつと……串戲じやうだんぢやあない。」

と蝶てふの影かげがさすやうに、ひら／＼と起たつて、肩かたを抱だく時とき、頬邊ほつべたを一寸ちゆつと吸すつて、もとの處ところへ抱だきこかし

「人が折角せつかく……あゝ、然さう言いへば、あの時ときもそんな風ふうをして突立つゝたつて歩行あるいたわね。」

「所作しよさのない役者やくしやだよ。一寸ちゆい々々遣やるがね。特に、あの時ときとおつしやると？」

「其その枕まくら——銚せんさん、並ならいべた枕まくらの私わたしの方が床とこの間まの上座じやうざだつたら——貴方あなた怒おこつて突つツ立たつたでせう。江えの島しまで。」

と兄哥あにいの膝ひざを手てさきで壓おさへた。

「……然う言つちやあ何だけれど、食べるものも食べないで、野宿をしようと言つた人が、御給仕つきで御馳走に成つて——今だから言ひますがね——胡瓜の新漬がおいしいと言つて、お香々のおかはりまでしたでせう。夜ふけたのに旅館へいひつけてさ。……さて、氏素性も知れない人を泊めると成つて、寢床を女中と入交らせるか、次の室へ寝かしてもしやあせず。座敷へ二つ並べたんですよ。大概のものなら、其のまゝ寝るにしても、頭だけは横へ引いて、私の寢床と、丁字形にでも成らうツて處を、つか／＼と蒲團へ胡坐で、お先煙草を喫かしながら、じろ／＼視てさ。しかも其がだわね。——枕ばかりぢやあなかつたんだ。私の間に私が居てさ。間を離れて居たんぢやあない。氣障に聞えちや可厭だけれど、一人前には、どうにか通用品もしさうな藝妓が、少々迷はせて遣らうか何かで、故と寢衣を……尤も濱の汐風に、しとつちやあ居たけれど、すきな長襦袢に着換へてさ、色氣を見せて、嬌態をしてふ、ふ、ふ。……一寸、

どんな顔をして居るの？」

「煙草を吸つて居るであります。」

「そして？」

「頻にむせて居るであります。」

「むせる煙草なら、およこしなさい。」
と、吸さしを引たくる。

「何をするんだい。」

「煙草を吸つて居るであります。」

「そして？」

「頻になめて居るであります。」

「なめる煙草なら……おつと……衰
は我博しよう、肝心な辛抱處だ。」

「よく辛抱をおしだつたよ——其のさ私を、
目と鼻の處へ置いて……銑さん、すつくり立
つたわね。」
「歸る。」
と言ふから呆れて聞くと、
「客を何だと思つて居るんだ、女主人の下座へ寝
かして。」
「——嬉しかったよ、覚えて居るよ、
立つて御覽よ、留めるから……もし、」
と氣の籠つた細い聲して、

「待たしやんせ、若旦那。」

「うゝ、あやまる。こゝは東京の玄関前だ。」

「そのかはり、まだ燈を点けません。――外

へ出れば砂丘の窪つたまりで寝る人が、瘦我坦にも、

21 あゝは言へない。――私は眞恫に、しみ

／＼と。」

「何、もう食つてる鯨だもの、永際で氣を抜いた
つて落つこはねえんだから、幕切の引張りの見
得だ
けさ。可厭に氣取つたんだ。氣障な野郎さ。」

「銚さん。」

「いま更めて、めされたは。」

「鯨だよ。」

「え。」

「私は鯨かい。」

「う、む、鯨だ。」

「大きな聲で……吃驚するわね――鯨

かい。」

「いや鯛だ、鯛だ、鯛だ。」

「黒鯛さ、甘鯛さ、いぼ鯛さ。」

「う、いや、櫻鯛、かゞみ鯛と、魴、さより、
鱧だ、ニだ、白魚だよ。」
と、その指を握つてひくと、指環の玉が、眞蒼に
閃然とする。もの干かけて衝と青い。

「や、電光」

「電車ですよ。――弱蟲。――あゝ、お

前さんは、雷様が可恐いんだつけね。」

「眞個だ。」

と聲も滅入つて、

「世にも可恐いのは、雷と叔父的だよ。」

「目の中へ入れたいほど、可愛がんなすつたと言

ふ、風説ぢやあない事。」

「それがね、可愛がるだけ、稽古が凄いよ。煙管
の雁首で、耳朶をコツンと来るのはのべつだからね、
面を着けた足が怯えて、舞臺の端をうろついて、土
間へ蹴込まれた事も五六度ある。――尤も稽古
の時だけど、――あれはいざ立つ時、見物の眞中
へ頭の上へ飛び出すほど生命がけの覽悟でさへ、桀
臺の端から三尺ぐらゐは、足が引込んで居るんだか
らね。」

「銑さん。」

「といたはるやうに、近々と顔を見て、」
「その御
修業が積んだから、」
「帰る。」
「と言つて、
枕を蹴
つて立てるんですよ。」

「お讚めに預つて恐悦だが、何に、その「歸る」あの「歸る」は、そんな修業で出来たんぢやない。―― やすものゝ、おいらん買で、工夫を凝した體術なんだよ。―― 格言にもありますが、（煙草はなくなる、火は消える。）と言ふ斷末魔には、「歸る」と突つ立つのが奥の手さね。をばさんの義務として、餘所で寢て居る女を起す。…… 眠い目をこすつて出て来て、こんな客は留めるほどの世辭も要らない、すぐに追出すまでも、とに角あひ方の顔は見られる。いさゝか、手ぐらゐは握るのさ。」

「下等だねえ。」

「へ、世界の違つたあなた方は御存じはあるまいが、宵にちらりと見たばかりで寄附かないのはまだしもだ。居ぶりと稱へて、身體を横に一所に居て、お腹が痛いと言ふのがあるよ。残念此の上なし。勿論買ふ方もよくないが、賣る奴も悪ですぜ。なま／＼とした膚身を、切一重に包んで投出して置いてあるのを、食はんと欲すれば火が燃える。餓鬼道之苦痛さ。燃え立つ緋縮緬とか云ふのは此かと思はれ

ます。だもの、お前さんと枕を並べて「歸る」
なんざ譯なしだ。――そいつが、もしか氣に
たら、お前さん、後に子供を持つたら、學問で修業
させるよりか、おいらん買で仕込むんだ。……
立派な人間。」

「馬鹿もやすみ／＼お云ひなさい。」
と優眼を行ったのが聲の影に籠つて見えて、
「そんな事ばかり言つて、門附の眞似なんか、い
つまでもして居ると、眞個よ、串戲のけて、せつか
くの銚さんがたまなしに成つ了ふ。何とかして叔父
さんのお手許へ歸つて、それこそ立派な人間に成つ
て下さい。……色戀に慾はありません。私と
しては、貴方が貴方で澤山だけれど、それぢや餘り
勿體ないもの。」

「御意見は尤もです。」
と聲も、やゝしめやかに、
「處がね、其の叔父的へ歸參と云ふのが。……」

「さ、私もね、貴方の事があるもんだから、頃日

も日本橋の方で御連中にお目に掛つた時——大
丈夫、貴方が芝に居る事なんか、おくびにも出しは
しないけれどよ。——それとなく聞いて見ると、
誰方も酒に紛らかして、委しい話をしないんだよ。
何だかね、お流儀の恥とでも云つたやうな事らし
い。……私の口から恚う言つたつて、銚さん
怒つては不可ません。——でもね、つい、——
寸々々と猪口が、辻つて、齒のすいた處では、——
お前さん、叔父さんのお愛しなさる、年紀の若い
御婦人を。」

「おや／＼おや、露顯かい。」

「露顯かいぢやありませんよ。のんきらし

い。……。」

「いや、一言もないがね、事實其奴が原因なんだ

よ。」

「一寸、お妾……。」

と又摺寄つて、聲を潜める。「お愛しなさる御

婦人と云つて置いて、其の上聞くには及ばなからう。

勿論それさ。——たゞし叔父的は、口ぢやあ

——帷子から緋縮緬のすくのが居なくつちやあ

涼しくねえの、乳のついた眞白な行火でないと寒さが
凌げねえのと――大口を利くけれど、其の實
淡泊して居るんだからね、實際お部屋にして居たか、
何うか、其處は餘り確でない。」

「そんな事は申譯に成りません。」

「はい、中譯はいたしません。」

「呆れ返るね、酒亞々々して。」

「いや、餘り呆れ返る風でもおいでなさるまい、
と思ふがね。」

「あやまつた、帳消し／＼。そのかはり、謹んで
聞いて上げるわ、何と云ふの、其の御婦人？」

「名かい。」

「お言ひよ、お言ひなね、言はないと抓るから。」

「痛え！ お舟でござい。」

と額を敲く。

「安ッばいよ、此の人は――」

「勿論、這つて出来たなかだもの。」

「勝手におしよ。――それを誰かに見附かつ

たの。あ、裏町の二階に誰か、人が。」

と、窓へ衝と出て腰を掛けて、屋根向うの影法師
から、兄哥を庇ふやうにして、團扇を使つて涼しい

十三

「それがね、見^み附^つかるにも事^{こと}を缺^かいて。」
婦^{をんな}が敷^{しき}居^ゐへ掛^かけた時^{とき}、ごろんと横^{よこ}に寝^ね轉^{ころ}んで、

「直に叔父的に見附れたんだよ。見附かりやうにもよりけりで、ふみを拾はれたとか、黒板塀へ月がさしたとか言ふんだと、もう少し色気はあるんだけど、負ぶをして這出す處を。」

「蚤が押入から出たやうだね。」 「似て居る

ね。」

と頬杖で、自若として、

「雌があれほど大柄ではないけれど、ぼつちやりはして居たよ、色白で。」

「あゝ、堪らない、裾がむず／＼するからさ。」

はら／＼と團扇で煽ぐ。

「蚤が集つたのさ。いや、妙な事を發明した。」

と、銚は一寸寝返りながら、

「高い處に婦が居ると、下から口説き可いものだ

ね。お舟の時間が然うなんだ。——よく、この高

臺で日中靜に仕事をして居たつけ——高臺と言

つて、お分りには成るまいが、お前さんも此の頃は、

見物に行くと言ふ。……霞町の舞臺の平土間

をずらりと見渡す正面に、一疊の疊を縦に十五六疊

敷込んだ高い棧敷があるだらう。——彼處はお

歴々が買切りなんだが、其處で裁縫さ。……

叔父の住居は、邸町の母屋と、眞中へ舞臺を挟んで、
樂屋裏の空地に、二階一室附下が二座敷と言ふ、何
處か、もの好きが建てた數寄屋づくりを古で引いた離
座敷に、靜に一人住んで居る。母屋の方は叔父の娘、
―― 私より年紀上だが、此即ち従姉だ。」

「これ、即ち許嫁だ。」
「黙つてお聞き。――之が女中を使つて、内弟
子などの世話をして居る。――叔母が亡くなつ
てからは、元氣でも老人だ。夜中なんぞ、どんな事
で、痰がつかへないとは限らない、離に一人ぢやあ
心許ないと言つて、忠臣、孝子が集つて世話をした
其のお舟さんさ。――叔父は出稽古が忙しくつ
て、晝間は滅多に内には居ない。それ、高臺でつゝ
ましく針仕事です。――もの柔かで、おとなし
くつて、」

「あゝ、肩が張る／＼。」と團扇で斜に敲いて
居る。

「弟子たちの騒は強いが、お舟の下へ（方）」

の字が附かうと言ふ、大先生の持ものとあつて、うかつには近づきませんな。其處へ掛けると、金がなから外廻り通力は利かないけれど、家の内だけは出沒自在な若旦那だ。―― 出入の俵屋へ届けてよこす、女郎のあやしげなふみ殻などを、袂の中で捻くつて、臺所の菰かぶりから、キウを極めの、渡廊下をぶぷらり／＼……がらんとした、土間棧敷は、幻影の五百羅漢を見るやうに、女郎の顔で充滿だが、懷中は空だらう。遊びたくつて、錢のねえのは、お前さんの前だけれど、花やもみぢの眞盛りを山奥に踏迷つたとおなじ氣持だ。心は時めくが寂しさに涙が出る。道をとぼつくやうに、板を渡つて、それ高臺を覗く奴さ。紅い針さしでぼつと上氣をしたやうに、針を運んで居るのはいゝ。もう此の方にも借りられるだけは借りてあるから、其の無心は利かないけれどね。お精が出ますね、とか言つて、ぬうと顔を出すと、それ、丁ど鼻のさきに、お舟のふつくりした膝がある。此を上から押伏せるんだと、天狗が引攪むやうだけれど、目のさきに浮いて、そこへ、手の届く花の枝さ、蝶々がとまるやうに、容子よく、つい、それ。」

「あれ、馬鹿々々しい。」

「彼奴は然うは申しませなんだ。」 とくす／＼

笑つて、

「行暮れたる旅の修行者、一夜の御無心申したい

な、か何かで、案外手軽にまとまつて、一所に丸木

橋を渡つたがね、―― 何うも憚う、まことに彼

は工合が可いね。」

「然うですかよ。……暑いこと。」

「否さ、高い處に居る奴を、下から憚う引張るの

は、鯉の瀧登りを、ひよいと抱くやうなあんばいだ

ね。」

「此の人は……箸にも棒にもかゝらないわ

ね。」

「そのかはり、片瀬でお目にかゝりました。」

十四

「あゝ、渡つたり。」

と叔父さんは、尻端折のまゝ、谿川の急流を踏むが如く、危く電車を突切つた。向う横町――

たしか銀座三丁目の自働電話のある角を入つた處で

―― 吻として、息を吐いた。――

「いや、此の思ひをするにつけても、足腰の利くうちに、赤頭と連舞に石橋を踏んで見たくないこともありません。」

「其處です……先生、唯今も申しましたな、皆が寄ると觸ると、強つて望んで居りますのでして。」

「だがね、今も言ふ通り、獅子の親と子の情合がむづかしい。」

「歴乎としたお弟子たちがおありなさるではありませんか、あの通り――」

「然れば……相當に動けるものはあるんだがね。」

「それを、いま一息お氣に濟むまでお仕込みなさ

れたら如何なもので。」

「それがし未熟にして、まだ渠等に子の情は持たせ得ませぬ。」

「すると、實の親子でなくては、舞臺へのせられないものですか。」

「むかしは全く然やうでありました。・・・

いや、電車通りでひやついて、些と酔がさめて来た

――現に、私が以前勤めた時は、親父が六十一

歳の、此の方が二十七歳――此でも少い時があ

つたね。唯一度だ。一生に唯一度か、二度の能だから

大事を取ります――先づ、眞實の親子でない

と、舞臺へは出さなかつたものだが、――今の

時節だ、弟子でも、甥でも。」

と言ひかけて、言葉が途絶えた。乾びた咳して、

「いや他人でも仔細ない。――稽古さへ積み

ばと思ふが、出過ぎたやうだが、此の方は屹と親の

愛を移して見せる。相手に子の情が出ねえてね。稽

古を巖しくすれば堅くばかり成りたがる、甘くすれ

ばだらけて了ふ。どつちも役に立たねえんだ。」

「ですが、他は知らず、お流儀のお弟子たちは、

随分皆眞面目ではないですか。」

「其の眞面目が、慾から起る眞面目だから不可え。
——たとへば親の敵討だ。外聞半分、敵を討つ
ことばかり考へて、寝ても忘れぬは然る事だが、其
の間に親のなつかしさ、戀しさを忘れて居ては何に
も成らねえ。——はゝあ、此の道を曲るかね。
拙者の言ふ事だつて曲つてゐるが。」

と、ひとりで苦笑して、

「道は甚だ意氣になつたが、言ふことは太く野暮
だ。」

出雲町か、鍋町あたり、銀座うらを行くのである（

「恰もいゝ話がある……榮作と言つた狂言
師だが、將軍家御覽の新春お能はじめの翁——

能役者の方でも、別火だ。潔齋だと今でも言

ふ……何せい、生命がけた。其の翁に、三番
叟を勤めて、手練を視せた……尤も若人の名
人だつたが——秘曲をこゝぞと舞つたはいゝが、
何處を何う取亂したか、禪をふら下げた。」

「おゝ、揮を、……それは大變。」と言
つて、十内の方が四邊を見廻す、ゆきゝはすれ違つ
て通るのである。

「彼の六尺の白い奴が、袴をたれて、月の都の御殿かと思ふ、塵一つない舞臺を曳摺り、足拍子に連れて、ひらりと踊る。古今の珍事だ。さすがに、お目觸りとあつて、あとでお係りから尋ねがあつた。其の方は舞臺を何と心得る。……。榮作は最早や一命はないものと心得ながら、八ツ戰場と心得ます。意氣な將軍で、そのため鞘をはずしたか、褒美を取らさう。――落し話だ。が、生死のうちに、此の禪の紐のたるみのある處が嬉しい。此だと獅子の兒にも成れます。私が緊乎と胸へ抱ける。――子が親に對する情は、決して眞面目ばかりなものではない。だらけて甘えて、馬鹿々々しく、禪が解ける筈だね。私が可愛く胸へ抱ける。」

と信玄袋も、懷中も、いつか意氣地なく、ずるけて下つて、蝙蝠傘を引摺つて、戸惑ひした田合の爺様のやうに成つて、

「緊乎抱きてえが、居りません、其奴が、その居ねえてね。」

「……處で、叔父的に、忍術見顯されの一件だが。」

と兄哥は、腕をだりとした匍匐で、いや何うも、箸にも棒にもどころか、もの干棹にも引掛けれない容體である。

「誰へ遠慮だか、先祖へ言譯だか知らないけれど、驢座敷ぢやあ、下階へ叔父が一人で寝て二階へお舟を寝かして置きます。――此奴が反對だと、開いた口へ牡丹餅だが、玉が二階だけに爪立つて糊から膳を下さなけりやなりません。箱庭のやうな狭い造りで、階子段が急だから、上り下りが危いので、下階へ寝て居るんだらうけれど。――些と事が億劫です。其のかはりお前さんなんざあ、エレベーターで押上つて露臺で構曳しようとも、一寸氣のつかない色氣のあるのは、お商賣から鼓の緒の紅い調で、階子に欄干が縫つてある。控の綱だよ。――如何です。」

「如何ですか、唯今轉寢をして居ります。」と

里吉はのつぺらぼう顔に團扇をびたりと當る。

「處が　　よく寝て居ても叔父は目ざとい。

「頭の上の二階ぢやあ、内證で口も利けないから、お舟を夜中に連出すんだが・・・婦がまた何を何う精進する氣だが、向うからは決して私の方へ出て来ない。　　勢ひそれ連出すんだが、こゝが大事だ。いくら密としても、（聲音が二つに響く）と言つて婦が可恐がる。・・・其處で負ぶして、右の控綱を力に、婦の足を宙に浮せながら、戀の重荷を、みしり／＼、歸鼠の化けた桂川さ。階子を下りて・・・はる／＼土間棧敷を抜けて、件の高臺まで背負出すんだ。　　一晩眞夜中に、例によつて、首尾よく階子段の切處を抜けて、くらやみを廊下へ出た處で、（お舟か。）と叔父に抜討に浴びせられた、「はい。」と震へ聲で漸と言つたのが、野郎の脊中のろくる首さ。天井の下に鬚がある。　　其ツ切で、叔父の聲はしなかつたけれど、「聲音が大きくつてよ、大きくつてよ。」と脊中で氣を揉む、八もん半半と約十もん半だ。剩へお尻の重量のかゝつた處へ、いま

の「お舟か。」で、ぐわち／＼震へが来たから
堪りません。」

「度胸はないのね。」

「まつたくだよ……自慢ぢやないがね。氣
を揉めば氣を揉むほど、あの土間棧敷八百人詰へ一
齊に登音が響くやうに思はれるものだから、お舟を
負つたまゝ、假花道と言つた形の歩行板へ四に遭つ
た、這出した。甲賀流か伊賀流か知らないが、要す
るに畜類變の一術さね。天なるかな。お幕のむかう
の、かゞみの間で、バツとスツチを捻られたと思
ひ給へ。舞臺一面、海のやうになつて輝いたらう。
夢中でお舟をもぎ落して、遁げるトタンに、ひよい
と見ると、叔父的が、はさみ帯の寢着姿で、その、
かゞみの間に立つて居る。お舟は、はずみで仰向け
に轉がつた身體が土間のしきりへ挟つて、手足を白
くニいて居る。――母屋の屋根廊下の出かゝり
には、従姉が朦朧として悄乎立つて居ようぢやない
か。――叔父が一世一代で演ると言ふ、連獅子
の赤頭を仕込まれて、蹴飛されて居る最中だもの。
獅子の兒どころか、千仞の絶壁へ鼠が轉げ落ちたや

うな形で、土間も棧敷もくる／＼と舞ひながら、高
臺を飛んで、中庭から塀越に路地を抜けたツ切
り。……つい、今度まで東京の臺所にものぞ
けなかつたよ。あッ。」
224 と言つて半ば急に起きた。

「あ、吃驚した、切火の響が胸を切つた。」
里富も、兄哥の動き方の激しさに、目覺めたやう
に團扇を落した。

「縁起棚へ、お燈明をあげたんだよ。」
「胸が
痛いやうだよ、ひやりとした。――遅いね、今
時分……」

「少女がお湯から歸つたらしい、……道草
をしたんだらう。内ぢや、お伊乃がだと、踏臺が要
るもんだから、私でない少女の方が、のつぽで脊
が届くからね。――歸つて来て點けたんだわね。」

「成程、いはれを聞けばだが、神棚へお燈明が點
いたと成ると、……これ二階は、些と魘魅魘
魘の形と成つたね。」

「可厭だよ、薄氣味の悪い。」
と、ずり下るや

うに窓まどからいすべにすべつて、
ぴつたり寄より添そふ。

十六

「抱だくのはまだしも、
親おや子この情じやうがうつし易やすい。
兒こ

獅子を谷へ蹴落す氣構で、（くはうきんのずゐ）
顯れたる、牡丹の花に頭を當てる。」

と、うつかりして、・・・ひたりと帽子に皺
手を當てると、眞白に颯と白毛の亂るゝばかり、六
方惣三郎の老の姿は、新橋の裏道に獅子を放つた風
情がある。

「ハタと、その、兒獅子を睨む處があるてね。」

其氣構が、不意に鋭かつたので、十内は吃驚した
が、ひよいと傍へ袴をひらいた。打水を踏んだ形が
ある。

此に氣の着いたらしい豆腐老人は、肩も腰も、又
とぼ／＼とした親仁に成つて、

「何、まあ雑と然う云つたやうなもので、舐める
とか、抱くとか・・・」

と其でも聲が大きいから、恰も擦違つた雛妓の、
水菓子屋の燈に薄彩色ながら燦爛として顯れたのが、
唐突に、鼻に鳴かれたやうに、横手の黒堀へすく
で行く。

振返つて、十内の大きな鼻がひく／＼と動いた。

「それ、愛着の形を見せる處だと仔細ないが、右の兒獅子を蹴飛ばす、――俗に（谷落し）と言ふんだね。勇氣を験すために――處で、蹴飛ばす方は兒の方、親の氣は心得たが、蹴飛ばされる方が、蹴飛ばされながらも兒の情合を含むと云ふのが難儀で。・・・こゝは、眞個の親子だと、少々未熟でも、おのづと恩愛の氣があらはれます。尤も一例で、何も蹴飛ばすのが連獅子の趣意ではないが、――いや、場所柄だから可いが、此が淺草の田圃に近いと親子で馬肉屋を捜すやうだ。・・・ふと御責殿、御人體に觸つては相成らん、餘り蹴飛ばしますまい。」

と獨りで。ハナマ帽を、ふか／＼と揺つて苦笑した。

「しかし、ずらりと兩側に灯の入つた處は、むかうの土手が見えるやうだね。はゝ、はてな新橋の御神燈が、吉原土手に見えるやうでは、狐に化かされた形がある・・・先刻鱧の鱈を食つた祟かも知れません。いや、獅子が續を食つて、狐に魅まれては穩でねえ。取留めのない三題噺だ。些とまだ酔つ

て居ます。」

と蝙蝠傘をストンと支いて、肩へ少し力味をくれる。此の時、横路地で、十内が肥つた身體を尻から揉込みさうに向直つて、

「先生、一寸お立寄を。」

「はてね。」

「粗茶を一杯獻じませう。」

「結構——だが、これは怪しい路地だね。」

「いえ、ほんのお少憩で。……いづれ、其の土手近なり、橋近なりお座敷を更めますが、とに角一寸何うぞ。」

と、あとしぎりに、溢出すばかり、狭い處を入つて行く。

叔父御は、頤で差覗く状しつゝ後に續いて、

「御芳志は過分ですが、お手柔かに願ひたいで。……些と他流仕合の氣味があります。」

と御神燈を透して言つた。此の燈が拭込んだ里吉の家を照して、格子先だ。

何と思つたか、信玄袋を柄に絡めて、蝙蝠傘を羽

目板に立掛けると、叔父御は懷中にした其の無地縞の羽織を、ぞろりと掴み出して、奴唄で手を通す。

十内が慌てたやうに、扇子を突出し、

「先生、先生……決して其には及びませぬ。ほんの唯お腰掛で。」

「いや、拙者は道場と心得ます。――小敵と見て侮るべからず。」

「飛んでもない、妾宅なんぞ。」

と十内は、いまの「小敵」を聞達へた。

「恐縮のいたり。――御串戯。――」

と悪く句讀を刻みながら、あぶら切つた頬に、其の恐縮と、御串戯を頬張つた、ゑみわれさうな顔色で、妙に草履の足をうかせて、セルをふはりと格子に立寄る。――

「さて……時に。――何が何だつけ。」

と、此の奥二階の薄暗がりには、唯た今、縁起棚の切火の音に、一刀切られた筈の銚之助が、依然としてだらけた言、手負らしくもない調子で、

「お里の方……もし、お部屋様。」

「気障だよ。」

眉がほんのりと鼻筋が白い、里吉が額で睨んだやうである。

「私はね、いま偶と巧い事を考へた。寝て居て金が儲かる以上の事だぜ。」 「澤山。」

「いゝえ、肝心な事ですよ。これはお燈明の光の裡から荒神様の御託宣を蒙つたくらゐの名案だが

ね。」

「勿體ないぢやあないの、――串戯に、そんなお前さん。」

「處が眞面目だから可いぢやないか。」

「ぢやあ、何さ……其の名案と言ふのは

――じれつたい。」

「然う乗掛つちやあ名案が潰れて了ふよ。何ね、

今度から此家へ忍ぶ時は、聴診器を袂へ心得て來よ

うと思ふが、何うだい。」

「何を言つてるのさ、藪から棒に。」

「藪から棒なもんですか、耳から管さ、あの護謨

の……要するに、ドクトル算だ。これだつ

て、端然として納まれば一寸代脈ぐらゐには見える

だらう。ね、巧い事を考へた―――宮時はアルコー

ルにガーゼと言ふのを診察後の消毒に、醫師方は喜

ぶつて話だけれど、そんなぢやあ店が引立たさない。
精々眞鍮の金盥に、手拭を折つて添へてさ、石罅函
を並べて置きます。然うさへすりや、臺所のガタン
だの、格子戸のガラリなんかに、はゞかりながら怯
氣ともしないね。それ「旦那が」眞個に不意に
飛込んで来た處で、算ドクトル、えへん！ でせ
う。」

聲をひそめて噴くやうに、
「伊達巻一つだつて診察中だぜ。其の階子段の上
口へ、天井へ問へるばかり、旦那が仁王立に突立つ
た處で、此方は又エヘンだ。（いや、御心配はあ
りません。） さ、何うだね。」

「はッ。」 とこみ上げる可笑さを、胸で堪へて、
痞を壓すやうな切ない笑で、
「銚さん、眞面目に言つてるの。」 「大眞面目
さ、蓋し名案ぢやあないか。但し或は窮したかね。」
「だつて、旦那が可恐いと成ると、……ま
あ假にですよ。……何時遣つて来ようとも分
りませぬ。」

「勿論です。だからぢやあないか。」

「然うすると、聴診器の方は何時なんどきでも袂にあるとして……だわね。」 「然うだ／＼。」

と急に意氣込み、

「今ツからでも心得て居る方が可い。すぐに一具買ひに遣りたいくらいだね。……資生堂なんか直き其處だ。」

「慌てものだよ。まあ、お待ちなさいよ。處でだわね、其の金盥の方は、恚うやつて逢つて居る時は、いつでも傍へ置く氣なの。」

と姉さんもだらしはない。

「そりや、……そりや何だ、旦那が飛込んでからでも構はない。お伊乃どんが大急ぎで水を張つて持つて来ればだ——しかし、其だと、旦那が何だか小火のやうだな。」

「まつたくね。」

「御挨拶だね、……勿論やけるにはやけませう……が。」

「今度は此方が御挨拶だわ。」

「まあ、お聞き。――矢張り金盞の出で居る

方が、道具つきはいいね、あらかじめ。」

「何が（あらかじめ）よ。……子子が

湧くわね、此の温氣ぢやあ、眞個に。」

「子子と言へば、不斷は金魚を泳がせとかう。用

のない時は、はらんばひになつて、苺を食べながら

二人で見ようよ。」

「はッ。」

と又あの婀娜な、情のある忍笑ひをして、

「可愛い坊ちゃん。」

「およしよ、小兒科ぢやあない。苟くも婦人科だ。

さあ、「一寸お横に――」ドクトルの假聲

だぜ。――押入は其方ぢやないか、面倒だ――

火入を抜いて、其の煙草盆を。」

「……熱いわ、髪が。」

「當前さ、熱のあるのは病人だもの。さあ、胸を

開けて、――聴診器を當てるよ。」

「冷い、あれ。」

「あ、コップの底に雫があつたか。」

電が、そら解の帯を映して、颯と射すと、雪のや

うな乳ちの間に、硝子コ杯ッを俯うつむ向けに伏ふせて居ゐた。
格子戸かうしどがガラリと開あいた。

十八

「姉ねえさん！」

同時に、お伊い乃のの大きな身からだ體たがどだ／＼と凄すさまじい
響ひびを立てると、階はし子こ段だんの中なか途ほどから、

「旦那だんなが、旦那だんなが。」

同時に電燈でんとうがサツと消きえた。

八はツと息いきを引ひく隙ひまもない。二階かいでは地誌ぢしん以上いじやうの狼ろう
狽たへかたで、兄あにい哥いはくる／＼と違ちがひ廻まると、齒けしから
ん事ことには、それでも、こんな時とき遁にげるのに心こころ得えがあ
つたと見みえる。傍そばの薄うす羽は織おりを引ひ攪まつて、ひよいと小こ

窓の敷居を跨いで、いきなり物干へ飛上つた。月も星も見えないのに、さながら宵闇の黒雲に、人間の團子を供へたやうである。

由來、卑俗な風俗史を案ずると、此の場合は、押入へ這込むのが寸法らしい。が實地へ臨むと約束どほりには行かないで、臨機應變のものと見える。暑い時分だから此も可からう、涼しくつて。

が、旦那が面前へ遅しく出た時は、里吉はさすがに涼しい顔はして居なかつた。

「暗いぢやないか。あゝん、これ。」

「さながら此は夜討だね。」

里吉の耳には、かすれながら底力があつた、凄いほどに響く聲が、旦那の他にもう一人。

「は、はい、唯今……」

其處で、電燈のスイッチを捻つたのであるが、實際涼しい顔はして居なかつた。

「つい、うたゝ寝をして居たもんですから、いゝ心持に涼しいんで……」

と申すまでもないが、そは／＼して、些と大袈裟に言ふと、我身を引吊すやうに帯の端を引上げながら、押入をぴたりと閉めた。

「あゝ。」

と膝を支いて、褌を合せ、恚うした婦に珍しく、ぼつと瞼邊を紅うして、

「おや、これは入らつしやい。……まあ、大先生。」

里吉は能舞臺で、豆腐老人を見知つて居る。

「何處か、涼しい處へお供しようと思ふのぢやがね、お前に相談をし、かた／＼ぢや、お茶を獻じやうと思つたもんでな。」

「まあ、それは可うこそ、茅屋へ。」

と、しめた押入をまた開けた。今度は水色の座蒲團を引出したので。……實は今慌てゝ片づけた組の二枚である。旦那の目にも、讀者方の前に、苺の皿だの、平野水の壺、コップだの、そんなものは何にもない。卓子臺の上は薩壙して……それが、れに食ひこぼしなどはしないから清潔に見える。が、

火入と灰吹を別にして、横にひつくり返した黒檀の煙草盆は、此の片附いた座敷の中に怪しき黒猫の如く蟠つた。

「いや、其方は可かん、風が入らん、夏は體裁よ
り風の事だ。―― さあ、先生、失禮ですが。」

と、どつかりと最う座に着くと、

「でも、此處は餘り。」と里吉は、其の煙草盆を袖で隠すやうにして言つた。

段の上口に控へた叔父御が、

「然らば罷通りますかな。―― 他流仕合の道場

でも、不意を打つて、もの除から、木劍で撲はすや

うな事はあるまいね。」

と、無意味な事を言つた。が、然うでない。こゝで、二階と階下とを、斜に睨めた叔父御の目には、階子段の眞下へ、俄雨に取込んだ洗濯ものと言つた形に、内箱と下地娘が押束なつて、二階を窺ふのが殺氣立つて見えたからである。

「へーい。」

筒抜けた返事をすると、叔父御が座敷へ入つたあ

とへ、むら／＼と湧いて来て、大汗の顔を出したの
はお伊乃である。

手を拍いたのは里吉で。

「お煙草盆を、きれいにして、．．．お茶を

ー」

「いや、お銚子だ。」

「おビールは角の伊勢屋が、よく冷えて居るんで
すが。」

「いや、先生はお銚子だ。」

「お銚子．．．大急ぎで、．．．ね、可

いかい。」

「へーい。」

もの干へ飛んだ銚之助は、危く十く内の影を見ないだけの餘裕があつて、欄干を跨いで瓦屋根へ出た。が、其のまゝ其處へ蹲んだのでは、大な挿鉢が轉げたほどには、直ぐ座敷から見えさうなので。……戸袋へびつたりと張着いて、震へる足をしめながら、とに角一息ついたのである。驚破や、旦那の聲がする。――暗いぢやないか。あゝん――と言ふ。無理はない。成程暗いに相違ない。

しかし電燈がばつと點いて、光が屋根へ流れたのを、肩ですつと躲すやうに、戸袋を摺つて用心の身構をした時は、大長刀を翻然とはづして、五條の橋の欄干へ飛んだ意氣があつた。

氣がつくと引攪つて出た薄羽織を、いつの間にか頭に被つて居る。が、何う思つても猫に紙袋で、薄衣を被いた御曹子の装ひでないから、人知れず悄氣た顔をして、袖を通して、屋根の上で裏通りを見つゝ

紐を結んだ。

背水の陣の見得である。銚之助も、こゝらは一寸
落着を見せたのである。が、續いて鼓膜を打つたの
が容易でない。もの干竿で目を突いたやうに思はれ
た聲は、叔父の底力のある掠れた奴で。

餘りと言へば、思ひ掛けないが、婦の旦那が、近
來熱心な直弟子と聞いて居る身には、却つて疑ふ餘
地もなかつたのである。

駈落前に、夜中の棧敷を逃廻つた時の、あの、叔
父的の寢着姿が、それ其の窓にすつくりと立つやう
に、銚之助は一縮みに成つて小さくすくんだ。

羽目を漏れて、芬とにほつたのは、下の火鉢でく
さやの乾ものを焼くのである。

此のにほひが、むつと立ち、雲を招いて、空の色
は濁りつゝ、いよ／＼暗い。

酒がはじまる、さあ、弱つた。――

「いや艶麗なお妾さん、お知己に一杯お酌を――

あゝ、苦々しい、苦蟲が、あんな口を利きはじめた。

「……ほう、然らば御新造。――おゝ、里吉さんか、其處で更めて姉さんと……さて、よく圓鬚が似合ひました。あゝ、薄化粧もお涼しい。……棚澤氏は果報ものだね。――これは／＼お詔と言ふ處へくさやが出ました。此方人等には鱧の鱧より、結句此の方が性に合ひます。並んだ御兩人の相性のやうだてね。はゝゝ、器用に筆つて、熱湯を通して、むゝ、醫油と味醂を割つて掛けたね。……いや、姉さんのお仕込と見えて、女中が透かさず心得たよ。――難有い、これは飲める。――いや／＼、飛んでもない。こゝへ洗なぞは、松江の鱸といへども眞平。……願ふ處は此の上は澤庵だ。支那料理のあと一人憧れます。が残念ながら、もはや年をとりました。厚切は頂けねえ。細くはやして、冷く絞つて、水氣を切つて、生姜をちよき／＼と、鰹節を氣取つて……。何、いや、買ひにお出しなさる。それは不可え。此の温氣に戸外をぶら下げたんでは、御近所が迷惑だ。

和睦を仕らう。胡瓜を薄く切つた處を願が《ふとし
て。――其の姉さんの白い手が、思ひ切つて、
ぐいと二の腕まで入つた糠味増と言ふのを是非ね。
はてな、御自分ではお活けなならない。――す
ると、あの肥つた女中が赤い腕で掻き廻すんだね。
いや其奴はあやまる。しかし、不心得だね。圓鬚に
對してもあるまじき事だ。糠味増を手掛ねえぢや
あ世帯持が覽東ねえ。むかしは、これ、女郎たりと
も、間夫とひけすぎのお取膳には、お香々を切つた
ものさ。(夜半の茶漬。)と稱へてね、此奴が
指を切る以上の心中としてあつた――餘り當に
は成りません。傳へ聞く所によるのだから――
しかし眞個だよ。成程旦那がお嫌ひなさる、あの移
香を。――茶殻を燃して燻すと除けるが。・
・・ふん、如何にも、愛妾の手枕に、ぬか味増が
香つては、十内先生辟易か、御尤もだ。いや、しか
し御挨拶だね。――時に手枕と言へば。――
と豆腐老人、大機嫌で一人で饒舌る。いや、一人
だけが銚之助の耳を貫いて聞えるのである。此の間
に、一枚々々、瓦に密と爪立つて、遁路を探して居
た。

「こゝに年明きの女郎の話があるがね。」

叔父御は泰然と胸を落して、猪口の肱を張りながら、十内と里吉を、等分に見較べて、

「尤も此處で女郎の噂をするのは、平家に對して、實盛が夜鷹の講義をするやうなものだが……・・・實は、今入る時艶な枕を見ましたよ。煙草盆に一寸懷紙を當てた奴だ。……」

十内は一向に氣づかなかつたらしい。が此を聽いて、思はず膝を浮せて、一寸俯向いて其のまゝ取澄ました里吉の様子は、（ワキ）の僧がワキ座で思ひ入をした形がある。

「ために忽ち三四十年飛んで若返りました。酒がうまいね、何うも甚だしく旨い。」

「平時のか。」

と十内も、此の時酌をさせて得意である。

「は、」と唯言つたばかり。

「いや、だしぬけに起請の怨靈が化けて出たやう

で、御婦人の前では恐入るが、棚澤さん、――
先刻途中で、裡のぶら下つた、あの話だね。――
征夷將軍が御覽の三番叟にヒユウ、ヒヤラリと、
それ振つた奴さ。丁ど同流で、當時での狂言師、鐵
平と言ふのを私も若い時によく知つて居ました。
名の如く藝も堅い。さして上手と言ふほどでもなかつたが、其の時分は、うまくないなりに仕事は律儀だ。不斷から、すべて一生懸命で、寒暖の挨拶をするにも、此の……」
と凹んだ帯を皺手で敲いた。片手に猪口を持つたまゝ。

「下腹へ、うんと力を入れるから、今日よいお天氣、快晴仕つたと言ふだけで、最う眞赤に成る。私も父親の處で其の鐵平が歳暮に來た時の事なんど覚えて居ますが、袴へびたりと手を支くと、鹽鮭をかう頭を取つてぶら下げざまに、片肱眞直に突張つて、眞正面を切つて、挨拶をするんだね。「粗末ながら、お歳暮でござる。」とそれ、眞赤で陳べる。――佐渡國のお百姓が京へ上つてお地頭に口上を申す通り。で、其の鮭を突張つた手に震が來

るんだ。――酒を飲むのも其の通り。」
と、豆府老の手つきも其の……少しづる、
づる。

「あくまで眞面目で居て、然らば不斷床几に掛り、
要しつとゝして、戲繪ざつとあらうずる扇子でも、
眞四角に構へて暮すかと思ふと、然うでないのさ。

根津の女郎の年明を引張込んで張蛸のふやけたやう
な鹽梅です。下谷御徒町に住つて居たがね。――

「若旦那々々々々。」と些と擦つたくツて恐れる
が、此でも父には忤だから、あるべかゝりに若旦那
と、私の事を可愛がり、甘やかしてくれましたので。家
を出入りの不首尾の節は、つい一寸々々と其のお狂
言の館へずれ込みます……いや、御多分に洩
れず、張扇の稽古より、勘當の形式を勵んだもので
ね。一時も、朝歸りが晝過ぎに成つて、内へは何う
も歸り悪い。淺草で講釋を聞くほどの錢も残らず、
おまけに金魚もうだりさうな炎天さね。廣徳寺前の
藥屋が接待に出す、金椀の水で呼吸を吐いて、其の
御徒町の鐵平方へもぐり込むと、女房は……
例の根津のだが……腸ぬきの人魚の様な形を

して、長々と晝寢をして居る。鐵平先生、越中禪一
つの素裸で、八疊の座敷中を、團扇を平にして、掬
ひながら、（なになにに川もありやな、熊野なる、
おとなし川の瀬々には）何とかで（幾瀬渡るも
野洲の川、すの股、あぢか、杭瀬川）――とか
言つて、稽古をして居る。うまく考へた。これは涼
しからう。（扱も／＼夥しい雑魚ぢや。）と疊
の目を雑魚にして居る。やけに此の方も氣取つたの
さ。「これは、いかな事。」とね。――そ
れから三人一時に井戸端へ出て、冷い水で顔を洗ふ
のが、……煤拂の夢がさめたやうさ。何はな
くとも一杯で、こゝで糠味唔のかくやが出ました。
根津のおいらんが所帯ぶりを見せた處さ――お
酌を願はう。――容子が可かつた。――い
や、然う言へば、姉さん、大分似ておいでだ。
はゝゝ、憤つちや不可え、その時分のおいらんは別
嬪さね。

「さて、やがて。」

と、豆腐老は、薄眠りに落着いた風で、猪口をぴたりと卓子臺に置いた。が、置いたかと思ふと早術で手酌で注ぐ。

「え、これ。」と十内が氣を附ける。

「まあ、お酌をいたしますものを。」

「いや、馴れて居ります。日頃の手練だ。お構ひなく。」と悠然と傾けながら、

「豆腐の聲が聞えるので、女郎あがりの右の細君が早速冷奴を誂へる。お狂言の鐵平は掃溜のわきの草叢から、蓼青紫蘇を摘んで来る。もと御家人か何かの古邸だから、此處邊は重寶さね。次手に白粉の花を折つて、床の間に投入して活けかへる。其のうち細君は馳走ぶりに、所帯かまはず、水色縮緬のけだしをお約束のおいらん端折で、鉢前でざぶ／＼と、水を打つ、風鈴はしきりに鳴る。日は蔭ると、寸法はよく成りましたな。――身だしなみは早いから、雑用を片づけたあとを、きれいに圓鬚へ櫛を入れて、ぼん／＼と刷毛で化粧を直して、浴衣を

着換へて、あらためて、「もし、おあつい處を一杯。」と成つた、つら／＼看ると、年増ざかり廿六七。――いま此年では話が冴えねえ。が、拙者とても同年配さね。――昨夕買った、芳原のいらんより此の方が餘程容子がいゝてね。是で座蒲團を敷かせ、お膳に向はせ、手料理でのませて、酌をしてくれて、然も無錢だ。案ずるに堅氣は安直い。……本來は客と成つて、餘所様で馳走に預り、御内儀、娘御なぞのお酌を忝うする時は、夢ではないかと思つて可いのだ。誰も膝を抓つても見ないのは、人間馴つこに成ると圖々しいてね。」

「御挨拶に困りますな、先生。」
「先づ……話だが。――扨いゝ心持に酒が廻るうちに、ふと夕立雲がむく／＼と湧いて出た。――おゝ、降つて來ましたか。」

「えゝ、ぼつり／＼大粒が。」
と里吉が窓に立つて空を覗いた。其の後姿は、一筋吹き込む風に裾まで靡いて、涼しいよりも、ぞつとしたやうに肩が顛へる。其の時である。銚之助の

影が戸袋を蜘蛛の如く横に這つて羽目へ隠れた。

「いゝ鹽梅だ。」

と、危いこと、のしりと立つて、額に扇子を翳しながら、十内が押並んで、物干を透かしたので。引違へて、里吉は胸を一寸手さきで壓へながら、下階へ下りさうにした處へ、豆腐老の煙管が、灰吹へトんと當つた。話の切れめではないのに、十内は窓へ外れたし、二人ともはづしかねたか、其のまゝ、里吉はまた座に着く。

「……と言ふのはね……筑波の方が
ら眞黒な雲を上げて來たではありません。――

鐵平が――根津で居流連の退屈まぎれに、煮豆を入れて握飯を臺の物で算段して、藍染川で鮒を釣つたなどゝ、若旦那の前で風儀を濫す、怪しからん話をしながら、灰吹をトンと遣ると。……
「やあ、えらく今の音は冴えましたな。」
と十内は窓に吹かれて居た。

「音ではないのさ。――其の時、妙に濃

く・・・・・・恚う、むら／＼と吸殻の煙が、一度、
灰吹の中へ押伏せられたやうな形に成つて、むく／
＼と勢よく。」

と徐に掌で空を煽いで、

「天井へ立つたのさね。――すると何うです。

其の煙を熟と睨んだ鐵平の容體が尋常ごとでない。
肩を怒らし兩肱を膝に張つて、うんと下腹に氣を入
れると、例の鹽鮭を突出す形だ。唸るやうな聲を出
して「まだ明けやらぬ東雲の、小雨の煙る山間で
ござるから、それと旗の手は見えねども、關ヶ原、
相川山、笹尾ヶ丘に、箕の手の陣は石田三成、島左
近、伊藤盛正、織田信高。小池村には島津の堅陣、
續くは小西行長なり。松尾山には小早川、南宮山に
は毛利秀元。其の東には長曾我部。岡ヶ鼻には長束
正家。なにし大谷吉槽は、藤川の流を前にあて、鳴
をしづめて控へたり。や、や、關ヶ原一面はなほ
立渡る霧にいたして。・・・と途方もない事
を饒舌り出した。煙草の煙を睨み／＼・・・
ね。」

雨の音やゝ急にして、風も強く吹込むと、電燈の
 灯をフツと攪ふやうに見えた、が、燭は一呼吸光を
 増した。轉瞬の間の明滅に、豆府老の、且つ酔へる
 しかみ面は、暗く成り、又・・・明るく成る。

「處が希有だね。鐵平が（濛々たる、此の朝霧
 の深きため、兜の廂を打仰ぎ、小手を翳しつゝ見渡
 せども。）ツて続いて言ふから、眞似にも仕方話
 にも、恁う霧を透す心組で、顔を上げて望むべきだ
 に――茶番の千崎彌五郎が、山崎街道で雨を凌
 ぐやうに、團扇で頭を伏せて、右の灰吹から立騰る
 煙を俯向けに睨んで居るのさ。――壺中に天地
 を何とか言ふが、其の容體だと、灰吹の中で關ヶ原
 のへ合戦がはじまつたんだて。・・・太く、も
 のに凝つて來ると此のお狂言方は、時々氣が變に成
 るて事を、仲間で風説をしたものだつけが、煙草の
 煙が霧に見えて、むら／＼と發つたんだ。――
 「五十間、七十間の先は、早や見え分かず。霧が動
 いて、雨をすくつて、風にあてれば、百間、百五間

の前までちらつと見える。敵の旗の棚引くと見れば、
其のまゝ又深く霧に包まれる。と、時はさていつ
なんめり……。慶長五年九月十五日、卯の時は
かりの朝まだき。是より先に内府公——権現様
の御陣でござる。」と言ふと、鐵平め、ぴたりと手
をついて叩頭をします。「

と豆腐老は、口を些と歪めながら、寂しい薄笑を
して言った。

「へい、はゝあ、其は。」

「まあ、何うも。」

と聞き人は二人、うつかりして、煙に巻れた形で
ある。

すぐに猪口を取つて一口して、

「親代々御扶持を頂いた事だから、成程、石田方
は、鐵平に取つて敵だてね。（権現様の御陣でこ

ざる。席を更めまするでござる。）——上座御

免の格です。へし曲つた袋戸棚に（嘯の面）と

言ふ、お狂言では、江州守山に産する蚊相撲の蚊だ

の、蛸の幽霊。然うかと思ふと蝉の精魂などが被ら

うと言ふ。例の興がつた面と一所に飾つてあつた、

太刀を一口、鐵平め、左膝に引きつけて、床の間の正面へ、眞四角に構へると、いしいしい．．．牽蹕を掛けるんだ。弱つたね。此の方もぼんぼち米を頂戴の側だから、其處へ寝そいべつても居られませんか。煙草盆を一具攫つて縁側へ出ると、「冷えます、とか言つて、一度堅く搾つた雑巾を當てゝ、おいらんが、それ花莫莖を敷いてくれます。小さな聲で、（困つた持病でござんす。）で暑さで些つと嵩じて居ると斷りながら、端近で蚊が多いから、すぐに今戸の豚が出ました。いで、權現に於かせられては、夜のまだ明切らぬうちよりいたして、赤坂表を御出發。此の時、野上、關ヶ原の間なる桃配山に本陣を据ゑさせらる。敵問およそ一里ばかり。福島正則左翼たり。此は専ら浮多に備へる。黒田長政右翼たり。此は如ち石田に備へる。．．．（よく覚えて居ませんが、何にしる）．．．細川、加藤、井伊の勢は、中央に備を立てゝ、小西、島津と相對す。後陣には、生駒、金森、古田の人数。さて福島島の陣の背後を、斜に取つて控へしは、藤堂、京極、寺澤にて、大谷の隊は相抗ふ。．．．時にお旗本の御人数をば、鶴翼、魚鱗に御陣取。）と

疊みかけた。

いま、私のやるやうなものぢやあないのさ。――
鐵平は本職です。盛衰記も讀めば、奈須も語る。
修業を積んで腹のある處へ、講釋口調で。剩へ魂を
灰吹の中へ打込んで、霧の中へ自分で突立つて居る
氣なんだから。――これから、旗色、紋じるし、
鎧の緘を讀出すと、ちら／＼と動いて、槍かなもの
も、きら／＼する。目に見えるやうなんだ。が、此
れを又ゆうべ氣の微酔の、内へ甘壺の悪い錢なしが、
うと／＼寝ながら夢のやうに聞くと言ふのが、御存
じはあるまいが、講釋のきゝ人の腹藝さね。――
御本陣を隔たること、疊三疊餘りだから、構はね
え。煙草盆をひつくりかへして、晝席なみに横に成
ると、枕頭に、團扇使をして居たおいらんが、懷紙
を當てる奴さね……。いや、御兩人も其處へ寝
なせえ、構はねえ。」と大な聲して呵々と笑つて、
手酌でとく／＼と傾ける。

「やあ、呐喊の聲が上つたな。」

其時、反身の膝に肱を張つて、目を空さまに頤で物干を覗きながら、豆腐老は氣を吸ふ如く、口許を耳の根へ捻曲げた。――雷の音がしたのである。

「先陣は既に手合せだね。……雨も来た。」

あゝ、ばら／＼と矢玉の如し。……快い音だ。

杯洗の水も急に冷く成つたやうで爽かだね。――

お一杯。」

と十内に衝とさすと、黙つて羽織の袖を捌いて、横に出す丸い腕に、細く酌をする里吉の白い手は、修羅場の中にも窈窕である。

雷が續いて鳴つた。

「これは、……今夜の方が餘つ程戦だ。」

――鐵平が關ヶ原を饒舌つた當日は、夕風と来て、眞に静で、例の蚊遣の豚の口から噴出す煙が此の方の其の煙草盆を枕に寝轉んだ縁側を籠めて、鉢

前へ充滿にスツと摩く。此を座敷の眞中から、鐵平が据眼で睨んだ奴さ。「また立籠める霧の間に、どどどどどと轟き渡つて、鐵砲の音おびたゞしく、續いて吶城の聲、三度揚がる。家康公、御馬を立てられたる所の桃配山の本陣と、治部、攝津、備前中納言、大谷刑部の陣場とは、早や一步は近う成る。驚破、鐵砲の音に連れて、御馬廻りの若ものども、我も我もと、一度に馬を乗廻す。――天下分日の大事なれば場數巧者も、もの師ども、さすがに心あせり、氣苛つて、備やゝ亂るゝ處に。」と兩手を振廻して鐵平が、其の手でどん／＼と下腹を敲く、胸を掴む。もの狂はしい體裁さ。「若旦那、あれなんでございますよ、お察し下さいまし。」と聲を密めて、内證だから、自からおいらんが、ほんのりと、蚊遣のなりに横顔を寄せるのを、恚う仰向けに見た處は、白粉の香が芬として、安い反魂香の裡にからくりの高尾を見る體さ。――怪しからん有様だ。考へると、年あきも浮氣ものだから、中年の親仁の狂人の狂言師より……此でもお能の若旦那の方が、一寸よかつたかも知れませんが、御兩人の前だがね。」

「先生、御地定さま。」
里吉は、しかし此の場合、言はねばならないものゝやうに言つて、氣のなささうに一寸笑つた。

「先づ話が。．．．はて、此の方は、鼻のさきの顔に氣はなくても、ものが、ものだから、ついそれ、芳原のを思ひ出して、恍惚とする。言語道斷。．．．鐵平は息をせいて、
「其の時、お顔本の一人、野々村四郎右衛門と申すもの、あわてるまゝに過つて、家康公の御乗馬に、おのが馬をどつとばかり乗掛くる。權現、腹を立てさせられ、ハツタと睨むと、
「いつでも、こんな場合に、舞臺の狂言でするやうに、上下の片肌を脱ぐ處を、浴衣の袖を脱いだから、胸は發露つて居るし、鐵平のは半分裸體で、
「忽ち御手の御刀を、ギラリとお抜きにあひ成り。．．．」
と言ふが早いか、自分、引きつけて居た一刀の鞘を拂つて、すかりと抜いた。
「―― 晃然としたてね。」

や、また光るぞ。」
と豆腐老は、斜めに身をしめ、
「かつたるく、

恂う、此方で、寝そべつて聞いて居た、私とおいら
んとに、じりりと向いて「悼め、不埒だ。」と
呼ばつた、までは講釋だが「おのれ姦夫。」
と躍掛ると、振被りもせず、横なぎに、刀を、すば
ツと。」

盧府老は颯と肱で拂つて、忽ち指を我が額に返し
て言つた。

「ね、此の眞額へ斬りつけたんだて。」

「いやあ、光る。」

「ひええ。」

と、雲を射る電光と、叔父の口の剣の光を、袈裟
に浴びて、眞二つに裂かれたやうに、思はず引呼吸
の聲を絞つたのは、屋根の上の兄哥である。

然も銃之助は、たゞ屋根の上とばかりで、屋根屋
が夕立に逢つたやうな暢氣なものではない。この時
しも、丁ど、廂合から高く大屋根を貫いて茂つた、
青桐に攀上つて、手足を縮めて居たのであつた。

地藏様の縁日に買った鉢植を並べたのでなくつては、二階から緑は見られないと言ふ、．．．此のあたりには珍しい。界限では、何處の横町からも直ぐ目に着く、唯一本だが、大幹の青桐である。

青桐の樹が構うちにあると、家が榮えるとか、衰へるとか言つて、別して此の連中には事やかましいのであるが、とにかく、恚かる青葉の風情は得難い。それには地ぬしのものだし、勝手には切れない處で、また此の樹が、切詰めた鄰家の塀と、里吉の三野家の塀との眞只中にあるのだから、どちらの構うちとも限らないので、いゝ事は取合ひっこ、わるい事は押つけっこにして、神経を休めて居る。――で、物干を横へ、戸袋を一廻りした押入の裏へ押被さつて居て、．．．いつか里吉が引越したてには、秋の末で、其の葉の、ばさ／＼と夜更に鳴るのが、馴れない女を驚かして、二階が震動するの、押入へ――鼠や猫の音でない――犬が産をしたの、盗賊が籠つたのと、一寸怪談じみるまで、履歴つき

のものである。

つい近頃の一晩も「うちの露臺の見晴しを御覽なさい。」で、里吉が兄哥を物干へ連出して、空を燦と、さながら屋上の芍薬園に星を鏤めたやうな暗夜の一處を指して、「何處だか、あれを御存じ。」……と言ふから「馬鹿にしちやあ不可ねえ。」……と澄したものの、すぐには見當が付きかねる。「いやだ、淺草の十二階ぢやあないの、だから見晴しさ。」と投げて言ふので「然うだ十二階だ、いやよく見える。」と小手を翳すと、脇の下を一寸つゝいて「擦つたい。」と言はせたあとで「三越だよ。いやだ、だから田舎廻りはさせたくないのさ。」と異に笑はれたものだつけ。其の電飾が花火のやうに、眞黒な大きな葉の重なつた中に流れて居たので、銚之助は其處の青桐を知つて居た。

兄哥は、はじめ屋根を桐の葉かげへ廻つて、しばらく身を潜めて蹲んだが、叔父の聲も手に取るやうに聞えると同時に、筒抜けに響きさうで、此方で幽

な咳も出来かねる。

呼吸を詰めて居たはまだしも、雨がばらついて来ると、時々誰かの顔が窓から出るので、隠場所の懐が浅いから、いまにも見附かりさうな不安に堪へない。

桐の葉に礫が飛ぶやうに降つて来た。

一度着た薄羽織を、紐を解いて又脱いで、袖だゝみにして懐中へ押込んだ。

「はッ、年増に仕贈られる。……ヘッ御羽織だ。……恚う庇つたのが身上さ。」

と罰の當つた、……まだそんな氣で。裾の搦まないやうに尻を端折つた。讀まるゝ方にお忘れのない事を希ふ。此は屋根の上の舉動である。目當が出来た、兄哥は其の桐の樹を傳はつて、庇合の細路地へ下りて遁げようとしたのである。

勿論、一方は表二階の窓廂で、すぐに通道だし、一方は叔父たちが陣取つた真正面の屋根だし、遁路

は此のはかになかつた事は言ふまでもない。

暗さは暗し、鳴つて来た。

二つばかり手探りで、密と桐の幹を探り當てゝ、
トンと思ひ切つて足を離して抱着いた。あとで思ふ
と冷い汗。――軽く飛びつくくらゐの間があつた。
――一尺ばかり、一度、屋根を上へ攀ぢてから、廂
下りにする／＼と下りかゝると、風のはやてに似た
のが大腕りを打つて颯と来た。

其の風さきへ、斧をひらめかすやうに、電光が乗
つて黒雲をみしと嚙んだ。

人も知つて……銚之助は非常に雷を怖れる
のである。

継る手も離れさうに、慌しく幹を下りに、ふと下
を見ると、足に焼火箸を刺されたやうに、身を引癢
つて、悚然とした。二軒兩方の塀の忍返し。念入り
に引裂竹と八寸釘の、桐を挟んで嶮しく鋭くくひ違
ひにすく／＼と尖つたのが剩へ続けざまの電光に、

め
目を刺すばかり、然も陰々として青白い
さ
かり、然も陰々として青白い
わ
藁をも通さぬ。
と
通さぬ。
あ
青白い
を
青白い
あ
貫

妙なもので、此の場合にも、銚之助は嘗て奥州路に漂泊うた折から――何處かの古沼で泳いだ小兒が、ふちを、すぼりと飛込んだはずみに、濺標に打つた杭の、水にかくれながら先の尖つたのが尻にさゝつて、腸を買いた時、ニヤ／＼と笑つたと言ふのを、聞いた事を思ひ出した。無慙な串刺。・・・そして、彼はニヤ／＼と笑つた。

唯、其の笑顔が、衝と電光に射られて、ニヤ／＼としたまゝの顔が、目に曝される。

また鳴雷。

今度は、疾く一寸も、踵の下の忍返の危険から遠ざからうとする衝動に駈られて、ずる／＼と上へ高く登つた。わななき／＼ぎ殆ど廂屋根の上へ等身を抽いて、梢に近く、蛙股に成つて、幹を抱いて、すくみながら留つたのである。

十内が顔を出しても、此處に此ならば見つけられる憂慮ない。しかし雨はしげく成つた。

お部屋様とさし並んで、天守から花火を見るやうな僭場上さで凝視めた、天空の電飾などは、もう眞暗で、目には入らぬ。頭の上に繋つた葉が、熱いばかりに、黒雲が舞下る。拳ほどの電が衝と海原の沖のやうな天の一方に燃えては、山なす雲に落ちて、鯨の腸のやうに、ひだを走らして、擴がり流れる。

この中で、高い處に、青桐にぶら下つた、蓑を剥がれた大きな蓑蟲のやうな形は、此の蟲を餌にして、可恐き魔の手が牙に似た忍返の顎を張る、毒蛇の淵に臨んで、雷を釣るやうに思はれる。

銚之助を青桐の棹につけて餌にした。 . . .
渠は目が眩んだ。

蛙股の下なる二階座敷の、叔父の聲が、すばつと鐵平の刀を抜いたのは、其の時であつた。

ぐわら／＼ぐわらと途端に鳴つた。

「ひえゝ。」

手を離すと、屋根に落ちる。……落ちるが、白分の落ちる方が、雷の落ちるよりは遙に得策だ。

銚之助は、一息さきには、何とぞ下屋振までも下りて、せめては足を瓦に着けようと思つたが、降り亂るゝ風の雨に、刷毛でたゝくばかり葉でなぐつて、横面とゝもに、あの、ぬつぱりとした幹がぐつしより、つる／＼に濡れたので、下りようとすると手足がいこる。飛ぶだけの覺悟をすれば、屋根へは落ちるゝとは思ふけれど、密と静には行れさうもない。誰だ、と眞向に浴びせられるほど、どしんと音がしさうで。……それさへ出来ないで居たのであつたが――

もはや堪らぬ。

一思ひに、ずる／＼ずる、又鳴る神の音とゝもに、屋根へ片釣瓶でドシンと下つた。

廂へ尻餅を突かないだけに、漸と、踏留つて、あ

の押入の裏に附着いたと思ふと、息吐く間もなく、
青竹で蟻を拂くやうな人を射る電光で、雨は忽ち篠
を束ねた。屋根瓦は川に成つた。

渠は前後を忘却した。

宙返を打つばかり、もの干の欄干を跳越えると、
窓から逆に飛込んだ。

何も見えぬ。．．．いや、たゞ酒臭い鬼が二
頭居て、色白な年増を、真中に引据ゑたと見たるの
み。

ぐしよ濡で、ぴたりと坐る．．．

「御免。」

と言つて、まうつむけに、疊に頭をすりつけた。

片手で、するりと摺り落ちる懐の薄羽織を壓へなが
ら、

「御免。」

と、もう一度、夢中で叩頭をするとゝもに、通魔
の如くズツと立つて、立つと齊しく、抜けるばかり
に階子段を下へ、どた／＼どた／＼。

いや、何とも、鳥か、獣か、人間に似た大きな蛙
が、雨風に飛ばされ、屋根から、もんどりを切つ
て飛込んで、座敷へ挫げて、階子へ流れた體であつ
た。
・
・
・
・

其のはずみに、轉げさうな勢で框を飛ばける兄哥に先立つて、内箱のお伊乃が、土間へ駈下りて格子戸を開けて遣つた。

呆氣も通越した始末だが、一も二もありはしない。兄哥の身體が階下へ落ちれば、戸外へ遁出すには極まつて居るからお伊乃は逸早くサツクを遣つたが、これも唐突で面喰つて跣足で居て・・・いまを頂上に、雨は車軸を流すのに、傘とも言はず、口も利かない。

兄哥の方も、雨具處ではなかつたのである。

眞赤に成つて汗をかいたお伊乃の顔を、一目見たのが、此の世の別離のやうな、情ない顔色で、戸を潜らうとすると、あツと叫んだ。

もの凄まじく鳴つたのである。

音に怯えて、茶の間を棒の揺れるやうに、ひよろ／＼と引返して、長火鉢の前を、ぴよりと臺所の出入口で、

「はあ。」
と言つた。

電燈も、じいと薄く滅入つたが、まだ此の光は消えずに居る燈明のちらつく縁起欄の下に、目ばかり
■つて、きよとんとして立つた下地妓と、見當なしに、面を八々と打撞けたので、

「はあ。」と引息に成つたのだが。

「可恐！」

と本能的である。嬰兒のやうに叫んだ下地妓は、奥の六疊へ遁込んだ。その理で、兄哥の身振も、眞蒼な顔も、幽靈の眞似をしておどかしたも同じであつた。

兄哥は勝手口へ飛びついた。水口から遁げようとしたのであつたが、トタンに光つた電光の激しさと言ふものは、すぐ其の横にある青桐の根を紫色に洗つて、梢まで幹に青い瀧を迸しらした。

いや、束ねた藁の崩れた體で、手足を揉みくしゃに、男も杭も何も無い。

「わつ。」

と一跳ねに跳戻つて、せめてもの隠場に、次の六疊へ駈込むと、「きやつ。」と、その下地妓が

悲鳴を揚げたのと、いま光で想つたより數十倍の大
音響で、霹靂したのと同じであつた。

兄哥は、くる／＼くると子子の影の伸びたやうに、
一瞬時寂然とした。茶の間へ舞戻つてふら／＼と廻
つた。が、ある間もあらせず、息も吐かせず、偉大
なる土蜘蛛の腹の裂けたる状に、電光の巢から可恐
い藍色の血を流した。

階子段を一もがきに縋り上ると、其の狼狽さも、
恐怖のほども察しられる。叔父の傍へひしと寄りつ
き、取継りたい手を縮めて、眞うつむけに領伏した。

「助けて下さい。」
畳についた手の指へ、額をつけて掉りつけて、あ
とへ、ずる／＼と退りながら、「た、助けて下
さい、叔父さん、お助けなすつて、お助けなすつ
て！」

此時、六方老人は、更めて見ようとせせず、懐中
を廣く、紹の羽織をスツと脱ぐと、さらりと投げて、
銚之助の背へ掛けた。

「助けて遣る。」

「へい、叔父さん。」

轟き渡る雷の中にして、

「突伏して居な、突伏一して。」

「へーッ。」

と頭から羽織を被つて、葭簀の隅へ手足を縮めた。

「あ、お銚子が。」

里吉は漸と聲が出た。――いや此の婦はもと

より、十内と雖も、殆ど口が利けないくらゐ、しば

らくは餘りの雷の激しさに、唯瞬をするばかりであ

つた。

銚之助が屋根から飛込んで、階子段を轉がつて、
下階中を跳廻つて、再びこゝに突伏して叔父の羽織
に包まれたまで、實はものゝ十分の間もなかつたの
である。

里吉は而してはじめて息が吐けた。生死はとに角、
はじめて息が吐けたので。

で、銚子を取るのをきつかけにして立つのに、羅
生門の脱が出て、襟髪を引掴まれる時よと覺悟した
が、無事に弱腰が座を離れて、壇に立つた。

二十七

「あ、」
吃驚した

――

階子段を下りて出會頭の茶の間

を横に、お伊乃が高腰で這つて居るのに、ふたゝび度肝が抜かれたのである。

「あゝ、驚いた。夜半にお社へ出る牛かと思つ

て。．．．．大概怯えて居る處ぢやあないか。串

戯ぢやあないよ。」

伊乃は遭ひながら、目を働かして、しかつめらしく、

「で．．．．ごんせう。それ、今ーで、

ごんせう。私、うっかり跣足だつた、ので、ごんせう。ですから、足を拭きませんと、何分にも。」

と言ひ／＼、倒に湯具の搦んだ太いのが二本、臺所へぬつと入る。

里吉は長火鉢の猫板の傍へ、園鬚も、肩も、腰も、トンともう斜に支いて、

「あゝ、松ちゃんは？．．．．松ちゃんー

下地妓が六疊から．．．．また此の顔が目一つ

でないのが見つけものくらゐな陰氣さでちよろりと出た。

「可^こ恐^{おそ}い……姉^{ねえ}さん、私^{わたし}、どうしようかと、
お、思^{おも}つて、思^{おも}つて、思^{おも}つて。」
「いゝから、其^その湯^{ゆのみ}呑^{つめ}へ冷^{つめた}いのを　ー　お水^{ひや}ぢ
やあないよ。」

臺^{だいどころ}所で、とツノと酒^{さけ}を注^つぐ音^{おと}がする時^{とき}、薄^{うす}りとし
た電^{いなびかり}光^{かり}が、やがて餘^{なごり}波^{なみ}に閃^{ひら}めくと、此^この凄^{すさま}じかつ
た風^{かぜ}も雨^{あめ}も、荒^あらびる事^{こと}に於^{おい}て、飽^{はうえつ}悦^{えつ}、満^{まん}腹^{ぶく}した體^{てい}で、
遙^{はる}か品^{しながは}川^{がわ}のはづれの方^{ほう}で、遠^{とほ}く雷^{かみなり}様^{さま}のおくびが、ぐ
うと響^{ひび}く。

里^{さと}吉^{きち}は、目^めをふさぐまで、酒^{ひや}をとく／＼と呷^{あふり}切^き
つた。吻^{ほつ}と息^{いき}して、鬢^{びん}のみだれを搔^{かきあ}上げながら、
「一寸^{ちよつと}、二^{ふた}つ三^{みつ}つ叩^{たた}いておくれ。」
と、襟^{えり}をうしろへ寛^{くろ}げ状^{さま}に、白^{しろ}々^{／＼}と、頸^{えり}を長^{なが}くさ
しのべたが、臉^{まがた}の色^{いろ}は尚^なほ、青^{あを}く、首^{くび}の座^ざへ直^{なほ}つた
風^{ふせい}情^{じやう}があつた。

笛^{ふえ}を吹^ふくやうな電^{でん}車^{しゃ}の響^{ひび}き、カラ／＼と間^ま近^{ぢか}に聞^きえ、
町^{まち}を忙^せしき人^{ひと}の往^ゆきかひ、話^{はな}す聲^{こゑ}、笑^{わら}ふ聲^{こゑ}。八^は方^{つば}に
雨^{あま}戸^とを繰^くる音^{おと}。三^さ味^み線^{せん}の音^ねじめの、其^そ處^こ此^こ處^ゝに沬^さえ

ると、雨の歇んだ、涼しい雫と同時であつた。

三野屋は、上下しばらく沈黙に領された。

「先生。」

十内は、肩の幅も、膝の圍も、見る／＼一倍大き
く成つたが、何とも形容の成りかねる面色で、

「これは先づ……一體何う言ふ事に成りま
すので。」

「されば。」

叔父御は猪口の際を、靜に扇子づかひをして居た。

「御承知でもあらうし、申すまでもないが

ね……いや、石田方大負けさ。それがしも、
生命助かり、大島へ流されもせず、恚うして無事で
居る處を見ると、先づ當合戦の島津だね。……

兵庫頭義弘は、枚田川、多良から伊勢路、駒野峠を
越えて、堺から船で九州へ落ちた。處を、此の方と
來ては、鉢前から木戸を潜つて、掃溜を飛んで、路
地から廣小路を逃げましたよ。

いや、既での事、鐵平權現の一刀を眞額に浴びる處さ。今思つても身震ひが出ます。」

「お察し申し上げる、はい、全く身震をなさるでせうでな。」

と粟立つ膚を探るが如く、太腕を擦りながら、十内は羽織にくるまつた銚之助を流眄に掛けた。目の色の赤味走つて、

「で、何う言ふ事に成りますので？ 先生。」

「されば。」

と、スツと片手を流して、六方惣三郎は徐ろに扇子を疊んで、

「おいらんも無事だつた。ーと言ふのが」

「ーがつき奴、遣るまいぞ。」で、鐵平は最う此處に及ぶと、椿がりを幕で追込むのが仕來りだから。ーあとで聞いた話だが・・・

おいらんは不斷無理心中の用心で氣轉が利くてね。帯、袖をつかまへられないやうに、いきなり裸體に成つて、座敷を水口に遁げたさうだし。ー鐵平は、その舞臺には目を掛けない、拔刀のまゝで木戸

口を、揚幕の氣で摺足で追つて出たから　　も
う既においらん見物と、いまの講釋の高聲に、生垣
から木戸口に一群をなした長屋近所にあまたの軍兵
が、手もなく押へて鎮めたさうでね。　　灰吹
と蚊遣の煙が消えれば、何もなし。鐵平の妄執の
雲も晴れました。　　其の晩は涼しくつて、い
月さね。

と、濟して、煙管を脂下つた。

十内は苛ち氣味に、むずと居直り、

「で、一體何う言ふ事に。」

と、のし懸る。胸幅かけて袴の膝も、やがて釣鐘ほどに意氣込の重量いのを、睫毛で受けるやうに、軽く薄睡つて、

「……其がね、落着までに、最う一條ありましたよ。——後日、舞臺で催能のあつた時だて……樂屋に、親ども、私たちの控へた處へ、お囃子方の座の右へすつと出た、當日の狂言三番目に、（鎌腹）と言ふのゝシテに立つ鐵平が、丸棒に、布繩で鎌を結びつけた、お極りの持道具を眞直ぐに直して、「今日夕未熟ながら、一世一代の鎌腹を仕る。……太夫に於かせられても、若旦那も、おすき見が願ひたうござる。」と言ひます。凄じい意氣込で。……と、其の鎌が造りものでない。觸ると指が落ちさうに、ドギノ磨上げた眞鐵の利鎌だ。——平生、おいらん上りが浮氣なために、又かと氣が狂つて、姦通呼はりをした申譯に、舞臺で眞個に切腹つける料簡なんだ。

此は可恐しい。……拵として、能舞臺で、眞の切ものはつかはせません、と何は措いても樂屋中で堅く留めた。すると、鐵平も又さら／＼としたもので、「舞臺で切れない腹ならば、いつまでも切らずに生きて居ります。――此で申譯は立つでござる。」と自分で極めて澄したもののさ。……しかし、吸殻の煙の立ちやうで、「慶長の五年九月十五日の朝まだき、朝霧深く立籠めて。」と關ヶ原の軍が灰吹の中から、魔法のやうに、むく／＼と立騰る事はそれ以來癖に成つた。――いや、かはつた男さね。」

「先生、」

と言ふ、唾もねばつて、

「其の鐵平は鐵平で、鐵平ですがな。此の場合は、此は一體、何う成るですかな。」

「然れば、……此の場合は一寸酒が切れましたな。」

十内は大根を揉潰すやうに腕を抜つて手を敲いた。

「……卑怯だわ——私が行かなくつては……まさか、赤間源左衛門——木更津

の博徒でもあるまいよ。」

里吉が、今度は度胸も透通るばかり、浴衣を涼しくすつと上つた。

「お熱い處を——」

「受持ちませう。ぐいと引かけた處でだね、此の場合、即ちこれなる。……」

と銚之助の頭のあたりを、引かぶつたまゝの羽織の上から押へて言つた。

「袋入の荷物をぶら下げて退散します。」

「成程、」

と故と落着いた體で、肱を撫でると、肱はぬツとして動かないが、持った扇子がぐる／＼、ふる／＼と忙しく廻る。……

「袋入のお荷物は一應相分りました。が、其の、お荷物は何う成りますので。」

「然れば、」

「大方は、途中お打棄りに成りませうですな。」

「いや、年を取ると慾が出ます。——棄てま

せん。」

「はーん。」

「宅へ持歸つて役に立ってます。」

「お役にーはーん……失禮ながら、其の汚れたものが……他は知らず、舞臺のお役に立ちますかな。」

「立ちますー一度、さつと朝湯に入れ

ば。……別に仔細はありません。」

「いや、しかし、……たとへば大復習と承はります、先刻お話の連獅子の如き大切なものでも、ですな？」

「されば、却つて使ひごろだと思ひますよ。」

「朝湯に入れば、と言ふお言葉で。」

「御意の通り。」

「はーん、それは又存外手軽なものですな！
豫て承りましたが、……他流は勿論、お流儀
はもとより、大切なお能には潔齋精進をするさうで。

ーまた其處が貴い處だーものに依つて
は別火の謹慎さへなければ成らんものと存じて居る。
が先生、事實然うなのではないですかな。」

「何、別火……は、あ、事長だ。町内安全
で、邸が廣い行爲だね……こゝに、私に老女
房があつて、もう疾に亡くなりましたが——此
の甥の奴に、優しい可愛い嫁が出来て、そいつに觸
らせまいと、嫉妬を妬く時など、得て、其の別火を
用ゐるのさね。……町内安全、邸は廣いや
——静岡へ落魄れて、尻端折で棒をついた時を
御覽なさい。其の時舞臺と、聲が掛つて、ぼろを着
たのが似合はなけりや、翁はもとより、天人でも、
小町でも、此の方、素裸で舞つて見せる。」——

惣三郎は扇子を膝に凜とした。

「……何々の能を勤めるために、潔齋中、

女は傍へ寄つても汚れる。」など、別火をす

る——勿體ねえ、結構な婦ぢやあねえか。お互

に——婦が傍へもよつてくれないやうな藝で何

うするんだ。——長屋ぢや出来ない事だね。坊

主も金欄の袈裟を着ると、儀式張つて、表向き精進

料理も誂へる。……破法衣に杖と笠で、ひだ

るい時は、秋刀魚の頭だつて舐らうぢやねえ

か。……驚破夜討だと言ふ時に、生死の境で

も、別火などは言つちや居ません。禪一本で抜合

はせる。いや言は變だ、はゝはゝ。」

268 と爽かな高笑ひで、

「太平で儀式張るより、舞臺を戰場と心得る。む

かしはお狂言方の目にも灰吹から關ヶ原が頭れまし

た。命がけに儀式は要らねえ。別火に籠つて生欠伸

をするより、熱爛で鼻唄の方が勇氣が出ます。軍に

勝つ。舞臺に於ても同じ事だ。翌日、大切の勤めだ

と思ふ夜は、熱爛い處を煽りつけて、すきな女郎で

も買ふのが祕事です。―― そのかはり朝湯だね。」

「はーん。」

と十内は嘲るやうに、

「變つたお流儀ですな。……尤も、貴方は、其處に袋を被つて居る誰かゞ、不義をして玩んだ婦人を、其のまゝ、今もつて傍に置いておいでなさると言ふ評判なご仁だ。―― まさかとは思つたですが、只今のやうなお説では、失禮ながら、或は事實かも分らんですな。」

「大事實、ははゝ。」

と扇子の小間を半ば開いて、

「それとてもだ、後で湯に入つたから清潔なものです。一向、傍へ置いて臭氣がしません。賢女、貞婦だつた處で、不精で垢だらけなのは薄汚ねえ。……いたづらをしたあとで、身體を清めた妾の方が遙か増だ。―― 勿論、本妻は事も話も別だ。―― 藝妓や、妾なぞは、世間、腕づく金づく意地づくだ、どつちでも勝つた奴が引奪る……たとへば戦場の分捕品さね。」

「先生、」

「はあ……」

「私も思慮がございます。――改めて御挨拶を

いたすとして、とにかく、お言葉に任せます。一旦、

其のお荷物ごと御引取を願ひませうかな。」

「いや、引取りますまい。」

「何ですと!。」

「私は師匠だ。……苟くも師たるものが、

弟子のために、引取らされると言ふ道理はない

ね。」

「貴方も御年配だ。お考へなさつて宜しい。……

……唯今のやうな暴言を放つ師匠は、師匠とは思

ひません。最早や弟子ではありませんぞ。」

「御勝手だ。が、しばらく。……憚りなが

ら當流に於ては、一旦師弟の契約をした上は、弟子

の妾宅の二階に於て、その弟子に勸當をされると言

ふ例は斷じてない。――破門を望みとあらば、

神佛の前で改めて仕らう。未だその儀に及ばぬうち

は、確に弟子だ。――師匠が申渡す、此處を速

かにお引取りなさるが可い。」

と苦い顔して又笑つた。

「檀那……其の方が餘程意氣だぜ。」

「流儀は呪はれるぞ！　――立つな。ふ、不埒だ。汚らはしい。」

と、立つて送らうとする里吉を、居ただかに睨み据ゑて、階子段の鳴るのが格子戸まで遠雷の如く轟いて、十内は黒雲を捲いて出た。

「姉さん、」

「はい、――申譯もござんせん。」

「いや、此の馬鹿野郎を、和女は茶人だ。――

却つて私からお詫を申す――旦那が怒つては面倒だ。お商賣に觸るだらう。あの大金持のやうな世話は出来ない。……が此の馬鹿野郎と離れないおつもりなら、拙宅へ引取つて、一飯をお分け申さう。寒いと、ひもじい思ひだけは、私がさせない。何うだね。」

と差覗いて、

「どうだね、眞個に惚れて居て、離れられないと

言ふのかね。」

里吉は洒落れた簪で髪を搔いて、うつむいて、

「いゝえ、……米櫃はまた出来ます。――

若旦那とは、あの……ほんの浮氣か

ら。……」

「あゝ、浮氣か、薩張して、至極いゝ。然うだら

う。馬鹿は此奴だ。……顔を合せ、顔を出し

なよ。」

張子のやうに、膝の蔭へ、うろ／＼と目ばかり出

すのを、熟と視て、「死んじまへ！……何

だ、それは……俺の甥の面か、他人の尻か

分らねえ。」

と布目を漉すやうな、掠聲で噴出したが、

「あゝ、しかし俺に優しく美しかった、唯一人の

姉に似て居る。」

と言つて、ほろりとした。

鼻をすゝつて、

「あの弟子より、舞臺に取つては、子獅子が大切

だ。姉さん、お前さんも藝人だ、何と思ふ？

杯^っ。
・
・
・
・
・
「
い
や、
浮^う氣^{はき}
の
方^{かた}
ー
ー
も
う
一^{ひと}

【完】